OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	遺墨に見る漢学の伝統 : 前田豊山・西村天囚の書
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2023, 63, p. 1-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91246
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

遺墨に見る漢学の伝統

―前田豊山・西村天囚の書―

湯浅邦弘

序言

「文房」とは文人の書斎の意味で、そこで使用される道具類が文房具として尊重された。特に、筆、墨、硯、紙は「文房四宝」または「文房四侯」と呼ばれ、教養の代名詞ともなっていく。中国発祥のこの文化は日本にも導入され、明治・大正期の文人たちも、墨筆で原稿を執筆し、また書を揮毫した。

原稿類は、刊行されることもあり、そこから文人の思想を直接知ることができる。研究対象としてまず注目されるのは、こうした文献資料である。一方、書は文人の趣味であるとされることもあり、美術・書道以外の分野では、研究対象としては文献資料ほどには重視されない傾向にある。

しかし、文人が筆を執って書を記す場合、それが他人から揮毫を求められたものであれ、あるいは自発的に記したものであれ、そこには、文献資料からはうかがい知ることのできない、その人の理想や願い、あるいは人生そのものが投影されている可能性もある。またそれに付随して、関防や落款として鈐印された印にも、それらが凝縮されている場合もある。

本稿では、そうした観点から、前田豊山と西村天囚の書に注目したい。前田豊山（一八三一～一九一三）は種子島（現在の鹿児島県西之表市）出身の漢学者。同地の教育と文化に多大な功績を残し、「種子島聖人」と呼ばれている。西村天囚（一八六五～一九二四）はそ

の豊山に学び、明治・大正期を代表するジャーナリスト・漢学者となった。

筆者は、平成二十九年（二〇一七）から、懐徳堂研究、西村天囚研究の一環として現地で文化財調査を続けているが、その過程で、豊山・天囚の遺墨が新たに発見された。それらを解読することによって、豊山・天囚の思想の一端を明らかにできるのではないかと感じている。(1)

前田豊山については、その遺文をまとめた『豊山遺稿』があるものの、まだまとまった研究書はない。また西村天囚についても、懐徳堂記念会編『碩園先生遺集』や後醍院良正『西村天囚伝』といった基礎資料はあるものの、日本漢学史や日本近代人文学史における意義を明らかにした研究はまだ見られない。まずは、こうした書作品を研究の突破口とすることにも一定の意味があろう。そこで以下では、前田豊山の書を三点（第一章～第三章）、西村天囚の書を七点（第四章～第十章）順次取り上げて考察する。

一、前田豊山「立誠」―種子島に尽くした誠―

この書は、種子島の前田豊山の旧家から発見された。縦三五・六×横七一cm。書は「立誠（りっせい）」（誠（まこと）を立つ）と読める。「誠」は漢学の重要概念で、『易経』には「君子は終日乾乾、……辞を脩めて其の誠を立つ（君子終日乾乾、……脩辞立其誠）」（乾卦、文言伝）とある。この場合は、為政者が外に文教を修め行い、内にその誠実を立てて功業となるの意であり、後の朱子学では、これを基にした「修辞立誠」の四字熟語として使われている。(2)それでは、豊山の書も、この「修辞立誠」を踏まえたものであろうか。

豊山は幼くして郷儒の平山西海（ひらやませいかい）と父の前田紫洲（ししゅう）の訓育を受け、十五歳で鹿児島に渡って宮内維清（みやうちこれきよ）のもとで程朱学を修めた。すなわち朱子学の学統に連なる漢学者であった。よって、この語についても当然朱子学を意識していたと思われる。明の胡広（一三七〇～一四一八）らが勅命を受けて編纂した『性理大全』には、「立誠而居敬」の句が見える。これも朱子学的な意味であろう。

実は、江戸時代の藩校や明治時代の学校で、この「立誠」を校名とした事例もある。山形藩の藩校は藩主水野氏が前任の浜松藩、唐津藩で設立した「経誼館」をそのまま校名に使っていたが、後に「立誠堂」と改

称している。(3)

また、明治二年（一八六九）、京都市内に六十四の番組小学校が設立されたが、その中に「立誠」小学校があった。この校名について、京都市教育委員会編『閉校記念誌立誠―輝ける一二四年の歴史―』は、もともと下京第六番組小学校として開設された学校が明治七年に「三川学校」に改名され、さらに明治十年（一八七七）、「立誠小学校」に改称されたと記す。またその名の由来について、当時の京都府知事槇村正直が『論語』の一節にある「立誠而居敬」に基づき命名したもので、その意味は、「人に対して親切にして欺かぬこと」であると説明する。

ただ、出典を『論語』とするのは誤りであろう。『論語』には「誠」字は二例見えるが、顔淵篇の「誠に富を以てせずして、亦た祇（まさ）に異を以てす」、子路篇の「誠なるかな是の言」とも、「本当に」「実に」という意味の副詞的用法である。『論語』には「立誠」という熟語は見られない。立誠小学校の名が「立誠而居敬」に基づくのであれば、それは、『性理大全』によるということになる。

いずれにしても、旧藩校や小学校の校名にも使われるくらいであるから、「立誠」が朱子学の説く道徳的な意味合いで豊山にも理解されていた可能性は高い。

しかし、豊山は「人に対して親切にして欺かぬこと」という平板な意味でこの書を揮毫したのであろうか。若干の疑念も残るので、まず「誠」そのものについて振り返ってみたい。「誠」を核心的な思想とする古典は、『中庸』（もと『礼記』中庸篇）であり、「誠は天の道なり。之を誠にする者は人の道なり」（第二十章）とある。誠はいつわりのない本来のままのあり方（天の道）であり、誠であろうと努めるのは人として当然の道であるという意味。一方、「立」は「たつ」「たてる」の意で、『論語』為政篇に「三十にして立つ」とあるのが著名な用例であるが、これは自身が社会的に確立するという自動詞として使われている。いずれにしても、明確に「立誠」という二字熟語になったものは、不思議なことに古代文献にはあまり見られない。

そこで次に注目されるのが、前漢時代の政治家賈誼（かぎ）（紀元前二〇〇～紀元前一六八）が著したとされる『新書（しんじょ）』である。その輔佐篇に次のようにある。

秉義立誠、以翼上志、直議正辭、以持上行、批天下之患、匡諸侯之過。

これは、君主の補佐役となるべき人について述べたもので、「義を秉りて誠を立て、以て上の志を翼け、議を直にして辞を正し、以て上の行いを持し、天下の患いを批し、諸侯の過ちを匡す」と読める。『易経』が述べるような為政者の功業としてではなく、王の輔臣の心得として「立誠」を説いたものである。正義を執り誠を立てることによって君主の意志が通るように手助けし、率直に議論して言葉を正すことによって君主の行動を支えるという。

もし、「立誠」書が、この賈誼の言葉のような意味を踏まえたものであったとすれば、それは前田豊山と種子島家との関係を意識するものであった可能性がある。豊山は、明治維新によって版籍奉還、廃藩置県が断行された際、島主種子島氏と島民との君臣関係が護持できるよう西郷隆盛に直談判したことで知られている。柳田桃太郎『種子島の人』（一九七五年）によると、それは次のような応酬であったという。

西郷が、「大義は決しとる。そげんこと今更でき申さん。種子島が反対なら、討つまでじゃ」と迫ったところ、豊山は毅然として、「これは心外、ただ君臣惜別よりのお願いで、種子島がこれに反するなど毛頭なし」と押し返し、西郷を説得したという。これにより、種子島氏はその後も存続が許され、島民との関係は継続されることになった。

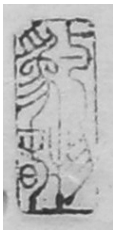
豊山は、その後も種子島氏を擁護し、明治十九年（一八八六）には、まだ七歳と幼かった種子島家第二十七代守時の後見人となった。この守時の補佐役として、「立誠」の言葉を胸に刻んだとも推測され、それは、豊山が初代校長を務めた榕城小学校に残る豊山の有名な書「人無信不立（人、信無くんば立たず）」にも通ずると言える。

それでは、この「立誠」書はいつ揮毫されたのであろうか。それは、「壬寅季春　豊山書」の落款から明らかである。「壬寅」（みずのえとら）は明治三十五年（一九〇二）、季春は陰暦三月。「季」はすえの意。この年は豊山七十一歳に当たる。

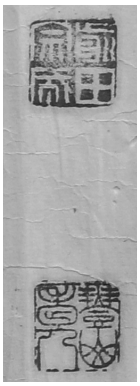
その前々年の明治三十三年、前田豊山と西村天囚の尽力により、種子島守時は華族に列せられ、男爵を授けられている。豊山の伝記と遺稿をまとめた森友諒編『豊山遺稿』（一九二六年）[4]によると、男爵になった守時は、豊山への感謝の意として、終身の顧問として待遇することとし、さらに伝家の刀剣を記念として寄贈しようとしたが、豊山がこれを固辞したので、子孫に至るまで、種子島家の紋章の使用を許すことにしたという。また、明治三十五年二月には、豊山の四十余年に及ぶ功績に対して、藍綬褒章が下賜された。この書を揮毫する一ヶ月前のことである。古稀を超えた豊山は、こうした人生の節目に当たり、改めて自身の人生を振り返ったのではなかろうか。豊

山の人生と信条。それこそが「立誠」だったのであろう。

なお、印記について附言すると、右上の関防印（陽刻）は字のかすれがあって読み取りにくい。これについては他の豊山書に鈐印されたものがないか別途検討してみよう。左下の落款印の内、上の陰刻は「前田宗成」。「宗成」は豊山の諱（いみな）（実名）。下の陽刻は「豊山老人」。豊山の字は士章、通称は譲蔵である。



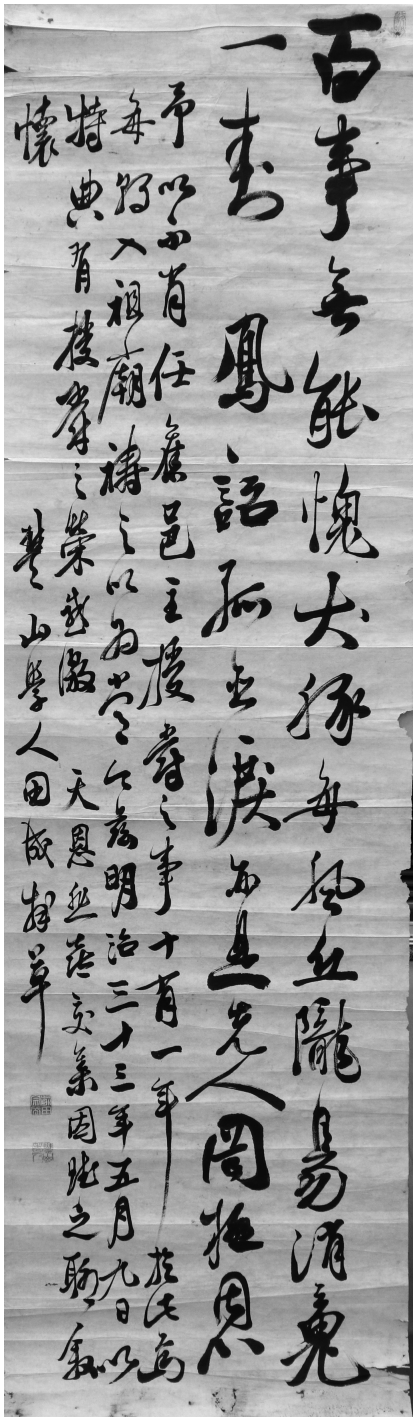
関防印



落款印「前田宗成」「豊山老人」

二、「百事無能」――生涯を掛けた種子島氏授爵――

次に、種子島の西村家所蔵資料を取り上げたい。これも、前田豊山の書であり、令和元年（二〇一九）八月の資料調査で確認された。



冒頭の四字をとって「百事無能」書と呼んでおく。縦一四九・八×横四二cm。長文の書で、落款の説明も長いが、以下にそれぞれの原文、書き下し文、現代語訳の順に掲げてみよう。

百事無能愧犬豚、毎登丘隴易消魂、一封　鳳詔孤臣涙、亦是先人罔極恩

百事無能　犬豚を愧じ、毎に丘隴に登りて消魂を易む。一封の鳳詔　孤臣涙す、亦た是れ先人罔極の恩。

何事にも無能で役に立たないわが身を恥じ、丘の上の墳墓に登るたびに消魂の思いを重ねていた。（このたび）一通の（授爵の）詔勅に涙することとなったのも、先人の尽きることなき御恩である。

「丘隴」はおか、または墳墓の意。ここは、種子島氏の墓所のことであろう。[5]「消魂」とは、物事に深く感じて魂の身に添わぬように感ずること。豊山自身が種子島家の補佐役を務めながら、力不足で守時の授爵がなかなか実現しなかったという謙遜の気持ちと、授爵が実現した喜びとを語っていると思われる。「鳳詔」は天子の詔勅。その直前が一字分空いているのは、天皇に対する敬意を表す空格の礼である。「罔極」は、尽きることがないの意。

次に、落款には、この書を記すに至った経緯が説明されている。

予以不肖任舊邑主授爵之事、十有一年於此焉、毎朝入祖廟禱之、以爲常、今茲明治三十三年五月九日、以特典有授爵之榮、感激　天恩、悲喜交集、因賦之、聊叙懐

豊山学人田成拝草

予　不肖を以て旧邑主授爵の事に任じて、此に十有一年、毎朝祖廟に入りて之を禱り、以て常と為す。今茲明治三十三年五月九日、

特典を以て授爵の栄有り。天恩に感激し、悲喜交集す。因りて之を賦し、聊か懐いを叙ぶ。豊山学人田成拝草

私は不肖の身をもって、旧邑主（種子島氏）授爵のことを務めとし、ここに十一年、毎朝祖廟に参って祭り祈るのを常としていた。今年、明治三十三年五月九日、特典により授爵の栄誉があった。天皇の恩沢に感激し、悲喜の感情がこもごも込み上げてくる。よってこれを記し、いささかの思いを述べる。

ここに「十有一年」とあるのは重要である。種子島守時が男爵に叙せられたのは、明治三十三年（一九〇〇）。そこまで十一年とあるので、授爵の議が起こったのは十一年前の明治二十二年頃であると推測される。

明治二年（一八六九）の版籍奉還により、従来の公卿・諸侯の位は廃止され、「華族」となることが定められた。その華族に対する格付けとして爵位制度が検討され、様々な案を経た後、明治十七年（一八八四）、華族令が制定される。それぞれの華族の当主が「公爵」「侯爵」「伯爵」「子爵」「男爵」の五つの爵位に叙されたのである。

最上位の「公爵」は、公家の内の五摂家、武家では徳川家宗家、「国家に偉功ある者」として公家では三条家、岩倉家、武家では島津家宗家、毛利家などが相当するとされた。明治維新前の大名家はおおむね「子爵」相当となった。従って、種子島家のように島主ではありながら大名ではなかった者は当初この叙爵に該当していなかったのである。

しかし、種子島家は二十七代続く名家で、特に天文十二年（一五四三）の鉄砲伝来や日本初の甘藷の移植など日本の歴史と殖産に多大の功績を残していた。そこで、第二十七代守時の後見役でもあった前田豊山は、種子島家の授爵を悲願として行動を開始する。それが明治二十二年頃であったことがこの書から分かるのである。

その具体的な行動の一つとして、靖国神社における鉄砲展示もあげられよう。種子島氏の家系と事蹟を記した『種子島家譜』には、明治二十四年（一八九一）、種子島所蔵のポルトガル銃を前田豊山が東京に持参して、靖国神社の遊就館に陳列され、それが天覧に達したことが記されている。また、同年五月の土方久元宮内大臣から前田豊山宛書簡に、「天覧済ニ付及御返附」の旨が記載されている。

さらに明治三十二年、前田豊山は上京し、西村天囚宅に長期滞在して、この件を相談している。天囚が『南島偉功伝』を著し、種子島

家を顕彰したのは、この年のことである。

そして、翌三十三年、明治天皇の特旨により、種子島守時は華族に列せられ、男爵を授けられた。『豊山遺稿』によれば、授爵の報を聞いた豊山は、感泣して「手の舞い足の踏む処を知らず」という喜びで、「本件の成功を期して朝夕祖先の霊を拝し加護を祈っていた」と周囲に語り、すぐに「書懐の一絶」を賦したという。それこそ、西村家で発見されたこの「百事無能」書だったのではなかろうか。十一年の歳月をかけてその夢が実現したとの思いが込み上げたのであろう。豊山の激情が表れた書である。

なお、「天恩」の前が空いているのは、本文の「鳳詔」の場合と同じく、空格の礼である。印記について附言すると、右上の関防印は、一部欠損があり正確には読み取れないが、「立誠」書と同様の印であると思われる。これについては別途検討する。落款印は、「立誠」書と同じで、上が陰刻の「前田宗成」、下が陽刻の「豊山老人」である。

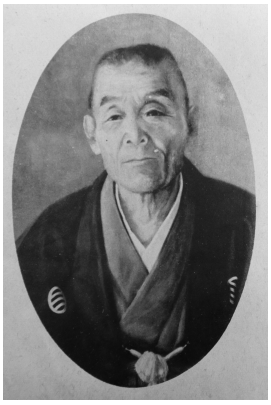
関防印

落款印「前田宗成」「豊山老人」

三、「暗香浮動」―ほのかに漂う梅香のように―

それでは、その豊山はどのような人柄だったのであろうか。『豊山遺稿』は、その性格について次のように説く。

> 資性温厚篤実、身を処する頗る謹厳、一日室内に端座して未だ嘗て膝を崩さず。容貌温和、子弟家人の過失あるも循々之を戒飭して善に帰せしめ、嘗て声色を励ま



前田豊山
（『豊山遺稿』所収）

し叱責せず。故に以て其の怒容を知るなし。

子弟の先生を視る慈父の如く、畏敬する神の如し。

右の内、「循々」とは、次第を追っての意。『論語』子罕篇に「夫子は循循然として、善く人を導く（夫子循循然、善導人）」とあり、その何晏集解に「循循、有次序貌」と説く。ここでも、豊山が門弟や家族の過失に際して、決して威圧的にならず、順序よく一つ一つ戒め、善に導いていったことをいう。また、「戒飭」の語を、『豊山遺稿』は「戒飾」と記すが、字形の相似による誤植であろう。「戒飭」は、「戒勅」に同じく、いましめる、注意を与えるの意。『漢書』楊惲伝の「欲令戒飭」の顔師古注に「飭、與勅同」とある。

自己に厳しく他者に優しく、穏やかな性格であったことが知られる。子弟は慈父のように豊山を慕い、また神のように尊敬していたのである。

こうした豊山の性格をうかがわせる書が、同じく西村家に残されていた。

この書は「暗香浮動」と読める。縦三四・五×横一〇五㎝。「暗香浮動」とは、北宋の詩人林逋（九六七～一〇二八）の詩「山園小梅」の一句である。林逋、字は君復、謚は和靖。前後の句は、「疎影横斜して水清浅、暗香浮動して月黄昏（疎影横斜水清浅、暗香浮動月黄昏）」。梅を詠んだ名句とされる。「梅枝のまばらな影があるいは横にあるいは斜めに清らかな水に映り、梅花のほのかな香りがどこからともなく漂い夕暮れの空に月が出ている」の意。

また、南宋の文人姜夔（号は白石、一一五五？～一二二一？）は「乃ち之を名づけて曰く、暗香疎影と（乃名之曰、暗香疎影）」（暗香序）と熟して使い、これも梅を表す。日本では、江戸時代の田能村竹田に「暗香疎影図」があり、大分市立美術館所蔵で国の重要文化財となっている。大分市ホームページの解説によれば、「谷間のうす暗い影の中で咲き誇る梅の馥郁たる様を描いた」名作であるという。これらの元になっているのが林逋の詩なのである。

豊山はこの「暗香浮動」の四字をとって揮毫した。梅は、春の訪れを真っ先に知らせてくれる花である。ただ、右のホームページが解説するような「咲き誇る」花、「馥郁たる」香りを放つ花ではなかろう。梅は、林逋が詠ったように「疎影」であり、また香りもほのかであるからこそ、文人の共感を得たのである。豊山は、種子島聖人と称されるほど当地の教育文化に貢献したが、自身は控えめで目立つことを好まず、こうした梅のようにありたいと願っていたのではなかろうか。

その推測に関わるものとして、この書に鈐印された関防印を取り上げてみよう。実は、この書の関防印と落款印は、第一章・第二章で取り上げた豊山書のものと同じである。かすれや欠損で読み取れなかった関防印がここでは鮮明に見える。

それは、四字熟語で「与（與）物爲春」と読める。これは、『荘子』徳充符篇に、孔子の言葉として記されるものである。

使之和豫通而不失於兌、使日夜無郤而與物爲春、是接而生時於心者也。是之謂才全。

（之をして和豫（わよ）せしめ、通じて兌（悦）びを失わず、日夜をして郤（げき）無からしめて、物と春を為す。是れ接（つ）ぎて時を心に生ずる者なり。是れを才全（まった）しと謂う）

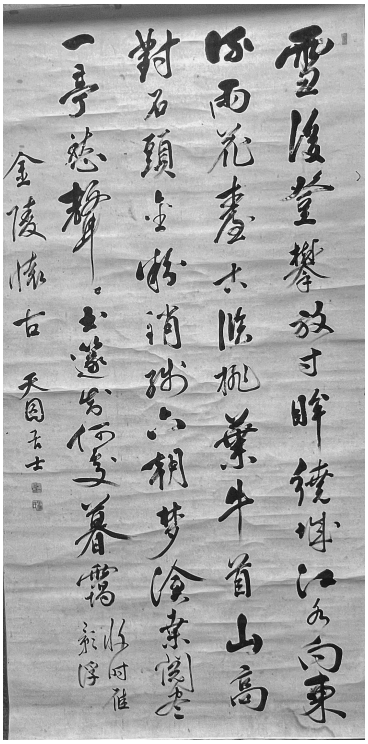
意味は、「事象の変化を調和させ、いつでも楽しみの心を失わず、昼夜の別をなくして、万物とともに春のなごやかな気をなす。これが継続して四季を心の中に生み出す。才（生まれつき）のままでいられるというのは、このことである」というもの。豊山は優れた漢学者でありながら、皆とともに春のようになごやかでありたいと願ったのではなかろうか。豊山の人生観が表れていると推測される関防印である。この書の「暗香浮動」とも共鳴しているようで興味深い。

関防印「与物爲春」

落款印「前田宗成」「豊山老人」

四、西村天囚「金陵懐古」―天囚が懐古したものとは―

この豊山の教えを受けたのが西村天囚である。天囚はどのような書を残しているだろうか。ここからは、天囚の書を取り上げてみよう。



まず、この書は令和四年（二〇二二）、髙﨑彰氏所蔵資料として確認されたもので、同年七月、西之表市役所より筆者にその画像が送られてきた。髙﨑彰氏の曾祖父は平山吉十郎と言い、天囚の母浅子と兄弟に当たる。吉十郎は、平山家から髙﨑家の養子となった。髙﨑家も種子島の有力な士族であり、その関係で天囚書を所蔵していたと考えられる。縦一七九×横九二cm。

この全文について、筆者の解読に基づき、その釈文、訓読、現代語訳、印記を順に掲げてみよう。

【釈文】

雪後登攀放寸眸、繞城江水向東流、雨花臺古臨桃葉、牛首山高對石頭、金粉銷殘六朝夢、滄桑閱盡一亭愁、聲々玉簫知何處、暮靄収時雁影浮

金陵懐古　天囚居士

【訓読】

雪後登攀して寸眸を放てば、城を繞りて江水東に向いて流る。雨花台古く桃葉に臨み、牛首山高く石頭に対す。金粉銷残す六朝の夢、滄桑閲尽す一亭の愁い。声々たる玉篴何くの処なるかを知らん、暮靄収まる時雁影浮ぶ。

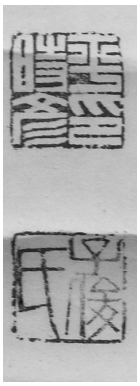
【現代語訳】

雪の降った後、楼台に登って見渡すと、金陵城をめぐりながら江水（長江）が東に向かって流れている。雨花台は古く桃葉の渡しに臨み、牛首山は高く石頭城に対峙している。六朝の夢は消え果て、一亭の愁いも過ぎ去った。優雅な笛の音は今はどこにあろう、夕暮れの靄が収まると雁の影が浮かぶだけ。

【印記】

関防印「松柏有本性」

落款印「平時彦印」「子俊氏」



関防印は「松柏有本性」、落款印は上が陰刻の「平時彦印」、下が陽刻の「子俊氏」。種子島の西村家および種子島開発総合センター（鉄砲館）に保管されていた西村天囚旧蔵印約百顆については、すべての印の調査、写真撮影を経て、湯浅邦弘編集・解説『西村天囚旧蔵印』（大阪大学人文学研究科、二〇二二年）として公開した。その一覧表に付けた通し番号で示すと、「松柏有本性」は25番。「平時彦印」は21番。「子俊氏」は22番である。

以下、本稿で掲げる西村天囚旧蔵印の印番号はすべてこの一覧表に基づく。この番号は、拙稿「小宇宙に込めた天囚の思い―種子島西村家所蔵西村天囚旧蔵印―」（『懐徳堂研究』第十二号、二〇二一年）の番号とも共通する。

また、鉄砲館には現在、この内の十一顆のほか、天囚が使用していた朱肉つぼも展示されている。立方体の木箱に石製の丸い朱肉つぼが入る仕掛けである。木箱は前蓋スライド式で、蓋には、「西泠印社　呉昌碩」と刻まれている。西泠印社は中国浙江省杭州にある篆刻専門の学術団体で、一九〇四年（明治三十七年）の創立。呉昌碩は、その初代社長で中国を代表する書画家である。

大礼服姿の西村天囚

西村天囚愛用の朱肉つぼ

さて、一見して明らかなように、この書は天囚の七言詩を揮毫したものである。その背景と内容について解説する。

簡潔に言えば、この詩は、明治三十年（一八九七）十二月から翌年二月にかけて、西村天囚が清国に出張し、武漢からの帰途、南京を訪れてかつての都「金陵」を懐古した詩である。

当時三十二歳であった天囚は、日清戦争後の日中関係の悪化を受け、親善特使の一員として中国に派遣された(6)。当時の実力者張之洞（一八三七～一九〇九）に漢口（湖北省武漢）で会合し、漢文の筆談によって日中友好の重要性を説いた。その際、張之洞が揮毫した書が天囚に寄贈され、その書が種子島の西村家に残っていることについては、注（1）前掲の拙稿「西村天囚の知のネットワーク―種子島西村家所蔵資料を中心として―」で述べた。

この漢口からの帰途、天囚は、同じく長江沿いの古都「金陵」を訪れている。金陵は江蘇省の省都南京の古名。呉・東晋・宋・斉・梁・陳の六朝が都を置いた。この地には古くから「王気」すなわち新たな王者が出現する気があるとされ、戦国時代にこの地を治めていた楚

の威王は、石頭山（現・清涼山）に山城を築き、金を埋めて王気を静めようとした。自分以外の新たな王の出現を恐れたためである。一説によれば、「金陵」という名はこの故事にちなむ。また中国を統一した秦の始皇帝も王気を抑えるため、この地に金宝を埋め、都の東北の鍾山（現・紫金山）を切り開き、城内を流れる秦淮河を開削した。地中の王気を流し去ろうとしたのである。さらにその地名を「秣陵」に改称して貶めた。秣はまぐさの意。その後、呉の孫権が都を置いた時には「建業」、その後「建康」と称されたが、古名の「金陵」が通称となっていた。(7)

六朝時代に都として繁栄を極めた後、次の統一王朝隋によって金陵は徹底的に破壊され、唐代にはすでにかつての栄華はなく、詩人に懐古される対象となっていた。唐の李白はたびたび金陵を訪れて詩を詠み、劉禹錫も「金陵五題」の詩を残し、許渾も「金陵懐古」の詩で、「玉樹の歌残して王気終う（王樹歌残王気終）」と謡っている。こうして金陵はかつての六朝文化の栄光と没落を象徴する詩題となった。天囚はこれらの懐古詩を念頭に置きつつ、みずからも「金陵懐古」詩を作ったのである。

それでは、天囚はいつ金陵を訪問し、この詩を創作したのであろうか。書の落款には「金陵懐古　天囚居士」とのみあり、制作年月日などについての記載はない。但し、この時の天囚の紀行「江漢遡洄録」（『碩園先生文集』巻三）が残されており、また帰国後、天囚は博文館の雑誌『太陽』に紀行「金陵勝概」を寄稿している（第四巻二十号、一八九八年十月）。さらに、種子島での資料調査によって、この出張に天囚が携帯したと思われる小型の日記が発見された。表紙には『紀行　明治卅年』とあり、毎半葉十行の罫紙に記して仮とじしたものである。墨筆により記されていて、かなり草卒な筆跡であるように見受けられる。旅行中に急いで書いたものであろう。いずれにしても、これら複数の資料により、その月日を推測することができそうである。

天囚は明治三十年十二月七日に東京を出発して大阪に立ち寄った後、十日、「梅田停車場」（現・大阪駅）で上野理一・池辺三山ら朝日新聞社の幹部に見送られ、神戸港から薩摩丸で出航。長崎を経由して、十四日上海着。そこから長江を遡って二十四日、漢口着。二十五日から翌年一月十日にかけて張之洞ら要人と会談する。

その帰途は逆に長江を下り、一月十五日、雪の降る金陵に到着。旧知の永井禾原（一八五二～一九一三）と邂逅する。禾原（名は久一郎）は尾張出身の漢詩人で永井荷風の父。当時、日本郵船上海支店長であった。翌十六日も大雪で、禾原は驢馬で明の初代皇帝朱元璋の墓「孝陵」などを視察し、天囚は轎に乗って石頭城まで行くが、市内も見通せないほどの悪天候であった。十七日は雪が止んで晴れ、同

宿していた禾原は上海に帰っていった。天囚は城内東北の丘の上に建つ三層の楼閣曠観亭（こうかんてい）に登り、玄武湖、鍾山、石頭などの名所を望んだという。前日までの降雪で、一面雪景色であったと思われる。金陵について、天囚は「江漢遡洄録」でこう評している。

金陵爲王者舊都六朝粉華之地、千古靡麗之場、雖麹爲茂草、而名區勝概遺蹟猶存。

金陵は王者の旧都で六朝文化が栄え、千年の美麗を誇る地である。淡い黄色（王気）は茂る草色になってしまったものの、名勝の景観と遺蹟は今もなお存している、という意味であろう。

その後、十九日に金陵を出発して二月五日上海着。九日神戸着、十一日に帰京した。よって、この詩は明治三十一年（一八九八）一月十七日、南京の曠観亭に登って旧都金陵を懐古した時のものであると推測される。この書を実際に揮毫したのは帰国後であろう。

詩の主題は「金陵懐古」という落款に尽きているが、中国詩人の金陵懐古詩を踏まえ、金陵の地名などを織り込んでいるため、以下では、重要語句について簡潔に語注を加えてみよう。

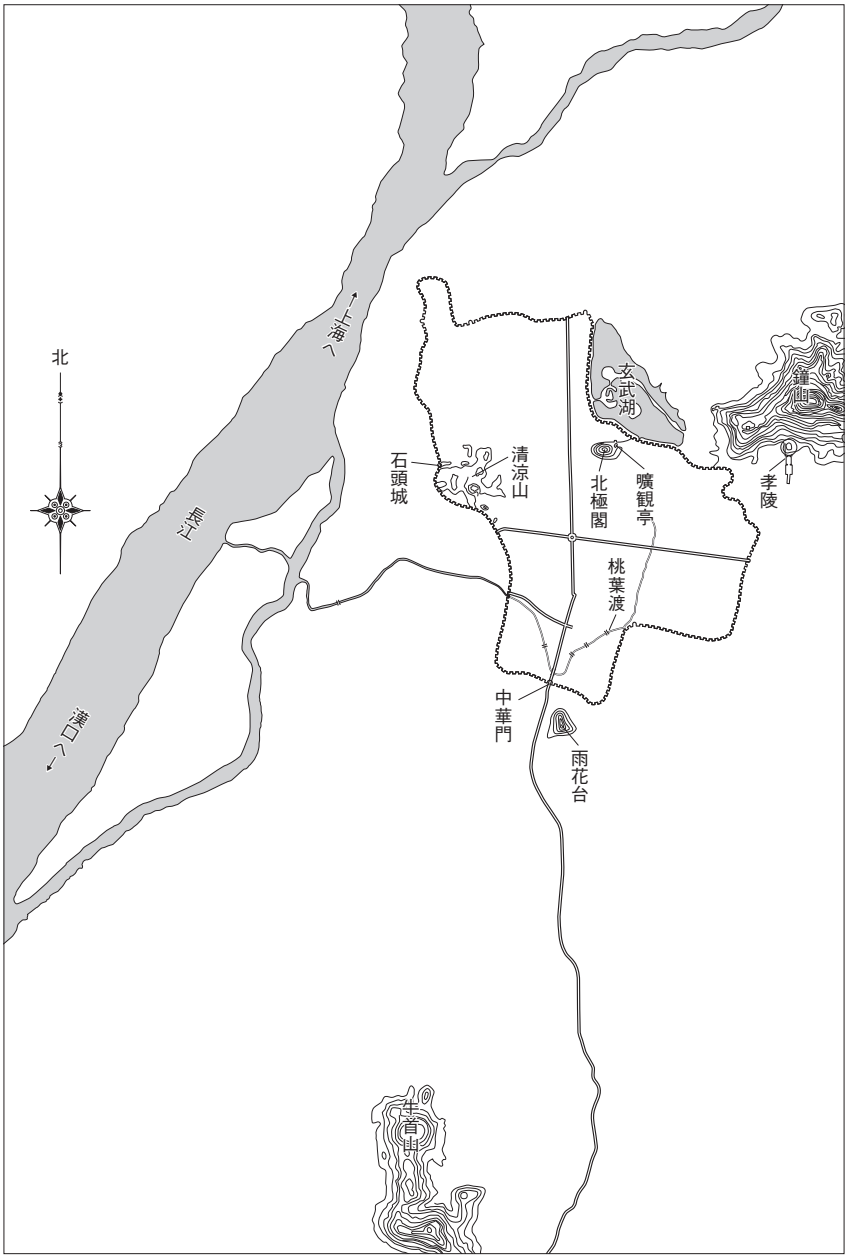
この詩は、『碩園先生詩集』巻二には「登金陵曠観亭」詩と題して収録されているが、詩句に若干の相違がある。

「雪後」は雪が降り、それが止んだ後の意。天囚の紀行「江漢遡洄録」によると、天囚が南京に入った明治三十一年一月十五日は雪で、翌十六日も大雪であったが、翌十七日は「雪霽」（雪がやんで晴れる）と記されている。「雪後」とはこのことをいう。

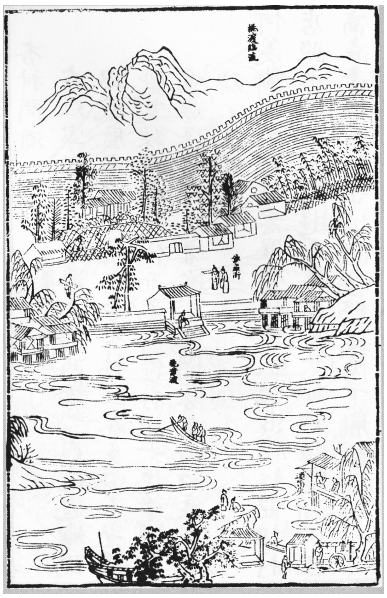
「登攀」は山または高いところによじ登る意。天囚は「金陵勝概」で、「曠観亭の下に至り、馬を下りて丘を登る」と記している。『碩園先生詩集』巻二では、ここを「登眺」に作る。旧金陵城内の東北側に鶏籠山（けいろうざん）という標高六十メートルほどの小山がある。ここには、鶏鳴寺など歴代の著名な寺院があり、また、明の欽天監（きんてんかん）の観象台に由来する北極閣という楼閣があった。その後ろに三層からなる「曠観亭」があり、ここに登ると金陵の雄大な景色を眺めることができる。高所に登って周囲を遠望し、思いにふける、昔を偲ぶというのは、漢詩の一つの定型的な表現である。

「寸眸」は眼。「放寸眸」は見晴らしの良い場所から周囲を広く眺める意。「放目」（見渡す）に同じ。「江漢遡洄録」によると、天囚は曠観亭から城壁越しに、北の玄武湖、東北の鍾山（標高四四八メートル）、西の石頭城（最高地点六十三メートル）を望んだという。こ

の詩ではさらに、視線を南に移し、近景で南北の対になる雨花台と桃葉の渡しを詠み、さらに遠景で南北の対になる石頭城と牛首山を歌い込んでいることがわかる。天囚のダイナミックな視野の広がりを読み取ることができる。この位置関係を、参考までに地図上に示してみよう。(8)



こうした金陵の景観については、多くの詩が残されているが、その詩に絵を添えた作品もある。一例として、明の朱之蕃が編纂した『金陵四十景図像詩詠』を取り上げてみよう。四十景の中から、ここでは、曠観亭のある「雞籠雲樹」、牛首山を描いた「牛首烟巒」、桃葉渡の流れの分かる「桃渡臨流」、雨花台の眺望を描いた「雨花閒眺」の四枚を掲げる。


桃渡臨流

雞籠雲樹

雨花閒眺

牛首烟巒

語注に戻り、「江水向東流」は長江の流れの様子を謡っている。金陵は長江沿いの古都で、長江が上流（西）から町の西北側をめぐるようにして東（上海方面）に向かって流れている。この句はそのことをいう。また長江の支流で南京市内を流れているのが秦の時代に掘削されたとされる秦淮河で、これに関わるのが、後述の「桃葉」である。なお、秦淮河は、全長一〇〇キロを超える川であるが、この内、金陵城内を流れる約五キロを、特に「内秦淮」または「十里秦淮」という。

「雨花」は旧城内南端「中華門」の南一キロメートルほどのところにある標高六十メートルの高台の名。『輿地紀勝』に、「梁武帝時有法師、講經此處、感天雨花、故名」（南朝の梁の武帝の時、雲光法師がここでお経を講じたところ、天がその素晴らしさに感応し、花を雨のように降らしたのでその名がある）と名の由来を説明する。江南屈指の登覧の地とされる。雨花台には南宋の詩人陸游（りくゆう）が「江南第二泉」と評した泉もあり、明代初期の思想家方孝儒（ほうこうじゅ）（一三五七～一四〇二）の墓があることでも知られる。天囚が登った曠観亭から望むと、この雨花台の下（手前）に次の「桃葉」の渡しが位置しているように見えたと思われる。

「桃葉」は秦淮河（内秦淮）の南岸にあった渡し場。東晋の書家王献之（おうけんし）（王羲之の父）の愛妾の名にちなむ。王献之は、秦淮河の急流を怖がる桃葉を心配して、この渡し場に出迎え、「桃葉又桃葉、渡江不用楫、但渡無所苦、我自迎接汝」という「桃葉の歌」を詠んだという。そうした故事のある名勝である。

「牛首」は南京の南十キロに位置する標高二四二メートルの山。もとの名は牛頭山。二つの峰が牛の角のように見えることからその名がある。多くの仏教遺跡があり名所となっている。天囚が登った曠観亭から遠望すると、この牛首山と次の石頭城とが相対しているように見えたと思われる。なお、ここを含めて南朝に多くの仏教寺院があったことについては、唐の杜牧（とぼく）が「江南春望」詩で「南朝四百八十寺、多少樓臺煙雨中」と詠んでいることからもわかる。

「石頭」は南京の西の山。標高六十三メートル。現・清涼山。『江寧府志』に「自江北而來、山皆無石、至此山始有石、故名」（長江の北からやってくると、山には露出した岩が見えない。ここに至ってはじめて石があるので、その名がある）と名の由来を説明する。三国時代の呉の孫権がこの山一帯に要塞を築き、「石頭城」と呼ばれるようになった。劉禹錫に「石頭城」詩がある。

「金粉」はきらびやかに美しく飾った様子。「六朝金粉」の熟語がある。

「銷殘」の「銷」はとける、ちる、つきる。「殘」はそこなう、ほろぼす。

「六朝夢」は六朝文化の華やかさとそのむなしさを夢の語で表したもの。関連して「六朝金粉」は六朝時代の文化の艶美なことをいう。また「六朝如夢鳥空啼」は六朝時代の文化を偲ぶ句。韋荘「臺城詩」に「江雨霏霏江草齊、六朝如夢鳥空啼、無情最是臺城柳、依舊烟籠十里堤」とある。今、金陵を過ぎると鳥の鳴き声ばかり空しく聞こえて、六朝の古を回想しても夢のようである、の意。

「滄桑」は滄海（あおうなばら）と桑田（くわばたけ）。「滄桑之変」は、滄海が桑田に転じてしまうように世の中の移り変わりの激しいこと（『神仙伝』七「麻姑」）。

「一亭愁」は金陵の南十里の地にあった新亭（労労亭）での亡国や離別の哀しみ。永嘉の乱で西晋が滅亡した後、漢人の貴族たちは長江南岸の新亭（労労亭）[9]に集い、北の郷土を偲び嘆いたという（『世説新語』言語篇、『晋書』王導伝）。また、北に赴く旅人との送別の宴を催す場ともなり、離別の悲哀という詩題にもなった。初唐の王勃「江寧呉少府卓餞宴序」（『王子安集』巻八）に「臨別浦、枕離亭」（別れの浦に臨み、離れの亭に枕す）、「憶風景於新亭、俄傷万古」（風景を新亭に憶えば、俄に万古を傷む）とあり、李白「労労亭」は、「天下傷心処、労労送客亭」（天下傷心の処、労労客を送るの亭）と詠む。新亭（労労亭）は、亡国を懐古し、離別を哀しむ地として謡われるようになった。天囚は、そうした故事を踏まえて「一亭愁」といい、それも「閲盡」した（時代を経て尽きた）と謡っている。

「聲〓」の「〓」は重文号。畳字「々」と同様。『碩園先生詩集』は「長聲」に作る。いずれにしても、次の「玉篴」の音が長く響き渡ることをいう。

「玉篴」は玉笛に同じ。りっぱなふえ。ここでは六朝時代の栄華の象徴として優雅な笛の音を取り上げ、今はそれも聞こえないと謡っている。李白「春夜洛城聞笛」に、「誰家玉笛暗飛聲（誰が家の玉笛ぞ暗に声を飛ばす）」。『碩園先生詩集』では、「長聲玉笛知何處」に作る。

「暮靄」は夕暮れのもや。杜牧「題揚州禅知寺詩」に「暮靄生深樹、斜陽下小樓」。この書では、ここに至って紙幅が尽き、以下「収時雁影浮」の五字を小字で二行に分けて書いている。「雁」は時を知る鳥で、隊列を組んで飛ぶことから礼を知る鳥であるともされる。また、北方に向かって去る鳥でもある。天囚もあるいは、新亭（労労亭）の故事を踏まえ、「雁」にそうしたイメージを重ねていたかもしれない。

このように、天囚の「金陵懐古」詩は、自ら高楼に登って金陵を眺め懐古した詩である。李白・劉禹錫など中国詩人の懐古詩を踏まえ、周辺の名所も織り込み、まるで歴史絵巻が展開するかのような優れた詩であると言えよう。

この金陵については、当時の日本の文人も多くの文を寄せている。天囚の一歳下で、朝日新聞の同僚でもあった内藤湖南（一八六六～一九七四）は、「万朝報」記者時代の明治三十二年（一八九九）、三ヶ月にわたって清国を旅行し、その見聞録を「游清紀程」と題して「万朝報」に連載した。後にそれを紀行『燕山楚水』（博文館、一九〇〇年）として刊行する。その中で金陵を訪れた時の印象を、「雄大なるは金陵の形勝なり」と述べている。天囚が「金陵懐古」詩を詠んだ場所、すなわち「曠観亭」も訪れており、鶏籠山の北極閣に登ると、清の康熙帝による「曠觀」の二字を記した石碑があったという。そしてここから金陵城内が一望でき、「曠觀」の名に違わないと感動している。

また、明治三十九年（一九〇六）～四十一年（一九〇八）に清国留学した中国哲学研究者の宇野哲人（一八七五～一九七四）も、その見聞録の『清国文明記』で金陵を訪れたことを記している。天囚や湖南と同じく鶏籠山の北極閣に登り、三層からなる「曠観亭」の最上階から金陵を眺め、その景観を「好絵画のよう」と述べている。(10)

天囚の金陵紀行や「金陵懐古」詩はこれらに先行するものである。直接的な影響関係は未詳であるが、当時の文人が金陵を訪れ、旧都に思いを寄せるという点では先駆的なものであったと言えよう。天囚は「金陵勝概」で、「清国に遊ぶ者、江を遡りて此を過ぎざるは稀なり」と述べている。

なお、西村家所蔵西村天囚旧蔵印の中には、「懐古」と刻んだ印がある（18番）。「金陵懐古」詩との関係は未詳であるが、あるいはこの金陵訪問がきっかけになり制作されたものかもしれない。

そこから想像をたくましくすれば、天囚が江戸時代の懐徳堂に寄せた思いは、もともと「懐古」であった可能性もある。しかし、その後、天囚は大阪人文会、景社などの文人サークルを作って懐徳堂の顕彰に努め、その成果は明治四十三年（一九一〇）の懐徳堂記念会創設となって表れた。さらには、同年の世界一周旅行を経て、大正五年（一九一六）には懐徳堂の再興を果たした（重建懐徳堂開学）。よって、懐徳堂に対する天囚の思いと活動は、懐古→顕彰→復興へと展開していったのではないかと推測される。「金陵懐古」詩はそうした天囚の起点になったとも言えるのではなかろうか。

五、「君父師友」―前田豊山との記念碑―

次に取り上げるのは、種子島の前田家で発見された西村天囚の書で、「君父師友（くんぷしゆう）」とある。縦四一・五×横一四八・四㎝。

「君父」とは主君と父親。「師友」とは先生として尊敬するほどの友人という意味。つまり、「君父師友」とは、主君や父親の師であり友である人のことで、これは、天囚から見た前田豊山のことを言っていると推測される。

天囚は三歳の時に父の城之助が亡くなり、父の友人でもあった前田豊山に教育を託される。また前記のように豊山は種子島守時の補佐役も務めていた。つまり豊山は主君守時にとっても、天囚の父にとっても、すぐれた先生であり、友人であった。そうした意を込めて天囚から豊山に贈ったものではないかと考えられる。

ただ、種子島氏と豊山とは、言わば君臣の関係で、「友」ではないが、ここに「師友」と言うのはなぜだろうか。実は中国では古来、優れた臣下は王の師であり友であるという観念があった。例えば、『説苑』君道篇には次のようにある。

帝者之臣、其名臣也、其實師也。王者之臣、其名臣也、其實友也

帝者の臣、其の名は臣なるも、其の実は師なり。王者の臣、其の名は臣なるも、其の実は友なり。

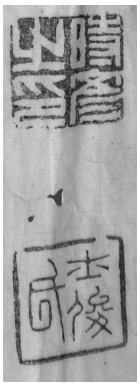
この文章は、馬王堆漢墓帛書『称』、『戦国策』燕策、『鶡冠子』博達篇などにも類似句が見える。単に君主の命令に従うだけでは真の臣下とは言えず、君主から師友として仰がれるような人こそ本当の臣下だという意味である。天囚もこうした意味を込めて揮毫したのであろう。

なお、四字熟語としての「君父師友」の用例は、明の文人李夢陽（りぼうよう）の『空同集』に見える（盱江書院碑）。

では、天囚は、この書をいつどのような心境で書いたのであろうか。その手がかりは落款にある。そこに「明治己亥初冬」とあり、「己亥」（つちのとい）は明治三十二年（一八八九）である。天囚は大阪朝日新聞の社員であったから長く大阪に居住していたが、明治二十九年からは東京朝日の主筆として一時的に上京していた。そして三十二年は、前田豊山（当時六十八歳）が四月に上京して二ヶ月余り滞在し、天囚はその間、恩師を温かく接待し、多くの名所古蹟を案内している。豊山が上京したのは観光のためではなく、長年の悲願となっていた種子島氏の授爵について天囚と相談するためである。天囚は同年、種子島家の功績をまとめて『南島偉功伝』を刊行する。この書は天覧に達し、翌年、守時は男爵の爵位を授けられる。その感激を記したのが、先の豊山「百事無能」書であった。つまり、明治三十二年とはきわめて重要な節目の年であり、この「君父師友」は豊山・天囚・種子島氏にとって記念碑とも言える書だったのである。

なお、次の行は「郷黨諸友正」のように見えるが未詳。署名は「天囚彦」。

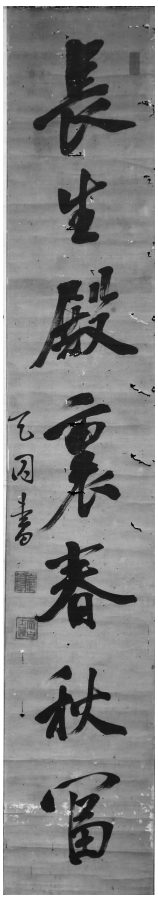
関防印「天囚」



落款印「時彦之印」「士俊氏」

右上の関防印は「天囚」、左下の落款印の内、上の陰刻は「時彦之印」、下の陽刻は「士俊氏」。子俊（または士俊、紫俊）は天囚の字。但し、いずれも、先に調査した天囚旧蔵印の中には見当たらない印である。

六、「長生殿裏春秋富」―長寿と繁栄を祈って―



次にあげるのも西村天囚の書であるが、これは、種子島の長野家所蔵資料である。縦一三四×横一二・五㎝。令和三年（二〇二一）に長野家で確認され、西之表市から解読を依頼された。長野家は代々種子島で庄屋を務めていた家柄とのことである。

書は、「長生殿裏春秋富」と読める。出典は、平安時代の歌人藤原公任（ふじわらのきんとう）の漢詩文集『和漢朗詠集』巻下の「祝」の部所収の慶滋保胤（よししげのやすたね）（平

安時代中期の貴族、文人）の「天子萬年」と題する詩で、全文は、「長生殿裏春秋富、不老門前日月遅」。

該当の漢文は「長生殿の裏には春秋富めり」と読み、唐の玄宗皇帝が建てた離宮「長生殿」の中では、これからの歳月には余裕がある、つまり長寿繁栄する、の意。楊貴妃とのロマンスで知られる玄宗皇帝の万歳（繁栄と長寿）を祝った詩。めでたい言葉なので、祝いの席や書き初めに記されることもあった。

これに続く、「不老門前日月遅」は、「不老門の前には日月遅し」と読み、洛陽にあった漢の宮殿の「不老門」の前では歳月がゆったりと進むの意で、これも前句とともに長寿を祝う言葉である。

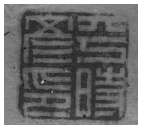
この書が長野家にあった理由は未詳である。落款にも「天囚書」の署名があるだけで、制作に関する情報は記載されていない。ただ書の内容から推測して、種子島または長野家で何か祝いや催しがあり、それに関わって天囚が揮毫したという可能性は考えられる。明確に揮毫を求められて寄贈する場合は、書に「贈〇〇」と相手の名を記したり、落款にその旨を明記したりすることも多いので、そうした記載のないこの書については、特定の個人に寄贈したという可能性は低いかもしれない。(11)

なお、こうした対句の漢文については、それを二幅に分けて、いわゆる「聯」（対聯）とする場合もある。ただその場合は、原則として落款は下の句に付けるので、この書が明確な対聯であった可能性は低いだろう。しかし、下の句の「不老門前日月遅」の書が別途あった可能性はある。

印について附言すると、右上の関防印は朱色がつぶれてよく見えないが、この形状からは、西村家所蔵の天囚旧蔵印には含まれないものであると推測される。

落款印は、上が陰刻の「平時彦印」、下が陽刻の「字曰士俊」。天囚旧蔵印の通し番号67と81に相当し、67の「平時彦印」は現在、西之表市の種子島開発総合センター（鉄砲館）で展示されている。

関防印


落款印「平時彦印」

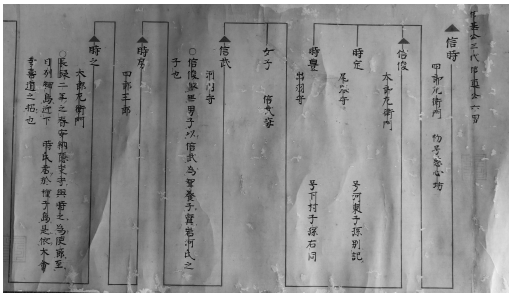
「字曰士俊」

天囚が「平時彦印」を使用しているのは、西村家の出自に関わるからである。

天囚は、郷里種子島からの依頼により、大正十年（一九二一）、「鉄砲伝来紀功碑文」を撰文し、その冒頭に次のように記している。(12) 筆者の理解に基づく書き下し文とともに掲げてみよう。

> 火器、古稱鐵砲者、今所謂小銃也。其傳来我國在三百八十餘年前。實自我種子島氏始。種子島出左馬頭平行盛朝臣。其子信基公、鎌倉初、封南海十二島、世治于種子島。因以島氏。

火器、古（いにしえ）は鉄砲と称する者、今の所謂小銃なり。其の我が国に伝来するは三百八十余年前に在り。実に我が種子島氏より始まる。種子島は左馬頭平行盛朝臣（さまのかみたいらのゆきもりあそん）より出ず。其の子信基（のぶもと）公、鎌倉の初め、南海十二島に封ぜられ、世々種子島を治む。因りて島を以て氏とす。



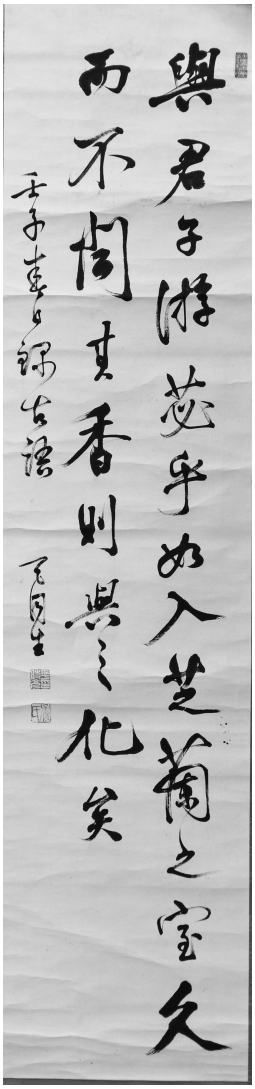
種子島西村家家系図（冒頭部）

種子島の祖とされる「左馬頭平行盛朝臣」とは、平行盛（?～一一八五）である。平清盛の次男の平基盛の長男で、左馬頭は官名。朝廷保有の馬を管理する馬寮（左馬寮・右馬寮）の内、左馬寮の長。朝臣は、もともと天武天皇の時に制定された八色の姓の第二位。のち、五位以上の人の姓名に付ける敬称である。その子の信基が初めて種子島を統治し、種子島氏を名乗ったという。

また、この碑文には、その種子島氏信基に六子があり、季（すえ）の子の信時（のぶとき）が初めて西村姓を賜ってこの地を采邑（さいゆう）としたことが記されている。種子島の西村家に伝わっている家系図にも、同様の記述が見られ、それを受けて天囚は、「平時彦印」と刻んだ印と、種子島氏の末裔であることにちなむ「左馬頭行盛裔」印（79）と「左馬頭行盛之裔」印（93）を持っていたと推測される。

七、「與君子游」―君子に感化される―

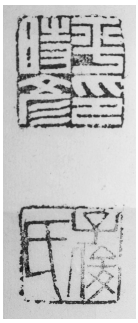
右の書で判読が困難だった関防印については、偶然にも別の資料で解読が可能となった。種子島開発総合センター（鉄砲館）所蔵の天囚書（ID8465）である。縦一三七×横三一・八cm。便宜上、冒頭の四字をとって「與君子游」書と呼んでおく。



まず、その印記について確認してみよう。

右上の関防印は明瞭に読み取ることができる。形状・印文も右の「長生殿裏春秋富」書に鈐印されていたものと同様で、「鉄砲権輿」。一字目は「金（かねへん）」に「夷」で「鐵」の異体字、二字目は「砲」、三字目は「權」（権の旧字体）、四字目は「輿」である。「権輿」とは、もともと、はかり（権）と物を乗せる台・こし（輿）で、物事を始めるときの基本となるものを意味し、そこから広く物事のはじめの意味となった。

関防印「鉄砲権輿」



落款印「平時彦印」「子俊氏」

この四字は、天囚の十三代前の先祖、西村織部丞（おりべのじょう）時貫（ときつら）が天文十二年（一五四三）の鉄砲伝来に貢献したこと、すなわち西村家が日本における「鉄砲のはじめ」に関与しているという自負を込めた印だと思われる。[13] あるいは、そうした功績を評価した他者（種子島氏など）から寄贈されたものという可能性も考えられる。西村家所蔵天囚旧蔵印の中には含まれていないが、天囚の関防印としてはふさわしく、天囚が使っ

ていた可能性は高いと思われる。

実は、西村家所蔵の家系図にも、「時貫」の解説として次のような記載が見える。

天文十二年癸卯三月二十三日奉従　直時君守内城在軍功。……（鉄砲伝来の経緯、省略）……是我朝鐵炮之權輿乎。

ここに「鉄砲の権輿」と明記されている。この家系図は、天囚の父の時樹（城之助）が天保十年（一八四一）に生まれ、幼名を「菊千代」と称し、同十五年に家督を継いだとの記述で終わっているので、天保年間頃の作と考えられるが、鉄砲伝来と西村家に関する意識は、天囚も同様であったと思われる。

参考までに、西村家の家系図を基にその歴代当主をまとめてみると次のようになる。別名、生没年や享年が記されているものはそれらの情報も附記する。この内、第九代が鉄砲伝来に関与した時貫である。また、この系図の最後にある「時□」が天囚の父であり、系図の記載はここで終了しているが、天囚はその後の第二十二代となり、鉄砲伝来の時貫からは十三代後の子孫ということになる。

なお、この西村家家系図では最後の人名「時」とのみ記されていて、その下は空白となっている。幼名は「菊千代」と明記されているが、諱の「時樹」が定まる前に書かれたのであろう。天囚の父城之助すなわち時樹が亡くなるのは慶応三年（一八六七）、二十七歳の時であった（後醍院良正『西村天囚伝』）。そこから逆算すると、天保十二年に菊千代が生まれたとするこの家系図と合致する。

初代	信時	四郎左衛門、初号慈心坊
二代	信俊	太郎左衛門
三代	信武	河内守
四代	時房	四郎三郎
五代	時之	太郎左衛門
六代	時俊	河内守

七代　時慶　太郎左衛門

八代　時弘　壱岐守。長享二年戊申（一四八八）生、天文十五年丙午（一五四六）九月二十八日没、五十九。

九代　時貫　織部丞。天文十二年癸卯（一五四三）十二月二十五日没。

十代　時安　織部丞、越前守、入道名意？。天文元年壬辰（一五三二）生、慶長四年己亥（一五九九）正月二十九日没、六十八。

十一代　時右　二郎四郎。永禄十一年戊辰（一五六八）生、天正十四年丙戌（一五八七）四月十六日没、十九。

十二代　時邑　讃三郎。天正六年戊辰（一五七八）生、慶長四年己亥（一五九九）十二月八日没。

十三代　時昌　越前、入道名意徳。慶長四年己亥（一五九九）二月五日生、寛文六年丙午（一五六六）九月二十五日没。

十四代　時孝　休四郎、織部。元和八年壬戌（一六二二）十月一日生。

十五代　時苗　初時英、源七、城之助、五郎左衛門、五左衛門、入道涼風。正保二年乙酉（一六四五）生、元文二年丁巳（一七三七）八月十六日没、九十三。

十六代　時之　初時之、中時盛、亦時之、童名菊千代、太郎左衛門、四郎左衛門、源五右衛門。延宝三年乙卯（一六七五）十一月二十三日生、寛延三年庚午（一七五〇）二月二十四日没、七十六。

十七代　時尚　初時民、童名千増、源太郎、五右衛門、万七、五郎左衛門、四郎左衛門、入道無適、元禄十三年庚辰（一七〇〇）七月十九日生。

十八代　時慈　後改時武、童名休四郎、休六、丈之助。享保十九年甲寅（一七三四）四月八日生、寛政十年戊午（一七九八）四月二十六日没。

十九代　時貫　時喜、時之、時邕、時現、菊袈裟、直之進、丈之助、四郎、城之助、四郎左衛門、涼風。天明三年癸卯（一七八三）正月十六日生、文政八年乙酉（一八二五）五月九日没。

二十代　時之　菊千代、城之助、源五右衛門。文化七年庚午（一八一〇）五月十日生、天保十四年癸卯（一八四三）六月十三日没。

二十一代　時□　菊千代。天保十二年辛丑（一八四一）十二月朔日生。

落款は「壬子春日録古語　天囚生」。干支の「壬子」（みずのえね）は、明治四十五年（一九一二）である。同年七月三十日、明治天皇の崩御により「大正」と改元されるが、ここには「春日」とあるので改元前の揮毫である。落款印は、上が陰刻の「平時彦印」、下が陽刻の「子俊氏」である。この二つの落款印は、西村天囚旧蔵印の21番と22番に合致する。

では、天囚が「録古語」（古語を録す）とした書の内容はどのようなものであろうか。また、この古語とは何か出典があるものなのか。この点について考察してみよう。

この書は『大戴礼記』曾子疾病篇の一節を基にした言葉である。『大戴礼記』は、前漢時代の儒者戴徳が、古代の礼文献を編集した書。戴徳の甥である戴聖の記した『礼記』（小戴礼記、五経の一つ）と区別して、『大戴礼記』という。曾子疾病篇とは、孔子の弟子の曾参が重い病にかかった際、「君子」について述べた言葉とされる。

但し、天囚書の記載と、『大戴礼記』の原文とには若干の相違がある。天囚書は、「與君子游、芴乎如入芝蘭之室、久而不聞其香、則與之化矣」であるが、『大戴礼記』の原文は、「與君子游、芴乎如入蘭芷之室、久而不聞、則與之化矣」で、「蘭芷」に作り、「其香」の二字がない。

一応、天囚書に基づいて訓読すると、「君子と游ぶは、芴乎として芝蘭の室に入るが如し。久しくして其の香りを聞かざれば、則ち之と化す」となり、意味は、「立派な君子と交わり遊んでいると、香しい香草の部屋に入るようだ。時が経ってその香りに気づかないようになれば、もう自分も同化されているのである」というもので、君子がその素晴らしい人徳によって他者を感化していくさまを説いたものである。

字句の微妙な相違はなぜ生じたのであろうか。そこで視野を拡大して古典を検索してみると、類似の語が、『孔子家語』六本篇、『説苑』雑言篇にもあることに気づく。但しそこでは、いずれも孔子の言葉とされており、文言もやや異なっている。『孔子家語』は魏の王肅が編集した文献と伝えられるが、詳しい来歴が分からない。『説苑』は、前漢の劉向が編集した故事・説話集。有名な言葉で、複数の文献に収録されていた。比較のため併記してみると次の通りである。【大】は『大戴礼記』、【孔】は『孔子家語』、【説】は『説苑』の略号とする。

【大】與君子游、芷乎如入蘭芷之室、久而不聞、　則與之化矣
【孔】與善人居、　如入芝蘭之室、久而不聞其香、即與之化矣
【説】與善人居、　如入蘭芷之室、久而不聞其香、則與之化矣

従って、天囚の書は、『大戴礼記』を基本としながら、類似した『孔子家語』や『説苑』の句を交えた形になっている。署名の前に「録古語」とあるのは、正確に『大戴礼記』を引用したというよりは、中国古典の有名な古語をアレンジして採録したという意識であったと推測される。

ただ、今一つの重要な可能性として、この書が中国の百科全書「類書（るいしょ）」を経由したものであるということが考えられる。「類書」とは、先行する古典の中から名言名句を抽出し、いったん解体した後、「天」「雨」「山」「友」「夢」などの部門を立てて再編集したものである。もともとは歴代皇帝の閲覧のために編集されたもので、唐代の『芸文類聚（げいもんるいじゅう）』や宋代の『太平御覧（たいへいぎょらん）』などがその代表であるが、名言名句を集めている便利な百科全書として、後世の文人に活用された。日本にも古くに入っており、日本の文人が中国の古典を読み、また引用する場合、実はこの類書に基づく場合があったことが指摘されている。

「類書」は、名言名句を再編集する際、原典の語句を意図的に修訂したり、省略したりする場合がある。また読者にその意味を分かりやすく提供するために見出し語を立てる場合がある。こうしたテキスト上の操作が、原典の文章を改変し、いわゆる故事成語を生み出す原因になったと考えられる。そのことについては拙著『故事成語の誕生と変容』（角川叢書、二〇一〇年）で具体的な成語をあげながら詳しく解説した。

この文について「類書」に記載がないか調べてみると、『芸文類聚』巻二十一人部五の「交友」に、「大戴禮曰、與君子遊、芷乎如入蘭芷之室、久而不聞其香、則與之化矣」と採録されており、天囚書と酷似していることが分かる。『芸文類聚』は、唐の高祖李淵の命を受け、欧陽詢ら十数人の学者によって編纂が進められ、武徳七年（六二四）に完成した。記事・文章の順番を整然と配列し、詩文の作成や検索・調査の便宜を図っている類書である。引用している古典は千四百種を超え、この内の大半は現在散佚しているため、古代典籍の遺文を知るための貴重な資料集となっている。日本にも早くに伝わり、よく読まれた。天囚書は、実はこれに基づいているのではなかろうか。

但し、『芸文類聚』が「蘭芷」とするのに対して、天囚書が「芝蘭」とするのはなぜであろうか。この点について手がかりとなるのは、懐徳堂文庫所蔵『芸文類聚』である。

まず、天囚と懐徳堂の関係について簡潔に振り返ってみよう。種子島出身の天囚は、東京大学に新設された古典講習科に官費生として入学するが、明治二十年（一八八七）、官費制度廃止により退学。東京から大阪に移り、明治二十三年（一八九〇）、大阪朝日新聞に入社する。漢文力を活かして数々の名文を執筆し、大阪の歴史や文化についても貴重な提言を発信して行く。

そうした中で、江戸時代の大阪にあった漢学塾「懐徳堂」に着目し、その顕彰を進めていくこととなる。天囚の主著が『日本宋学史』であることから分かるように、恩師の前田豊山も天囚も朱子学の学統に連なる漢学者であった。そしてまた懐徳堂も朱子学を基盤とする漢学塾として百四十年の歴史を刻んだ後、閉校となっていた。天囚はこの学校に共感したのである。

天囚の顕彰活動は明治四十三年（一九一〇）の懐徳堂記念会の誕生、大正五年（一九一六）の懐徳堂再建（重建懐徳堂開学）として結実した。蔵書は江戸時代の懐徳堂資料を継承したものと記念会が新たに購入したものとがあった。そして天囚が大正十三年（一九二四）に亡くなると、その旧蔵書が「碩園記念文庫」となって懐徳堂に入った。

こうして重建懐徳堂は蔵書を増やしつつ大阪の市民大学として新たな歴史を刻んでいくが、昭和二十年（一九四五）三月の大阪大空襲によって木造校舎が全焼。懐徳堂記念会は拠点を失った。ただ鉄筋コンクリート造りの書庫棟にあって災禍を免れた蔵書は、昭和二十四年（一九四九）、大阪大学に一括寄贈され、「懐徳堂文庫」約五万点となって現在に至っている。

従って、天囚が重建懐徳堂の教壇に立っていた時期、懐徳堂にも自身の書斎にも一定の蔵書はあった。重建懐徳堂所蔵本の『芸文類聚』テキストは、明の王元貞が校定した重刊本で、天囚が閲覧していた可能性も考えられる。そして、該当部の記載は、天囚書と同じく「芝蘭」となっているのである。

よって、この天囚書は、『大戴礼記』や『孔子家語』などの原典から直接引用したものではなく、実は類書の記載に基づくものであった可能性が高い。字句の異同を対照すると次のようになる。【芸】は『芸文類聚』、【懐】は懐徳堂文庫所蔵重刊本『芸文類聚』、【天】は西村天囚「與君子游」書の略号とする。

【大】　與君子游、芷乎如入蘭芷之室、久而不聞、　則與之化矣
【孔】　與善人居、　如入芝蘭之室、久而不聞其香、即與之化矣
【説】　與善人居、　如入蘭芷之室、久而不聞其香、則與之化矣
【芸】大戴禮曰、與君子遊、芷乎如入蘭芷之室、久而不聞其香、則與之化矣
【懐】大戴禮曰、與君子遊、芷乎如入芝蘭之室、久而不聞其香、則與之化矣
【天】（録古語）　與君子游、芷乎如入芝蘭之室、久而不聞其香、則與之化矣

時系列で整理すると次のようになる。

『大戴礼記』曾子疾病篇の言葉
↓採録（その際、『孔子家語』や『説苑』を参考にして「其香」の二字を加える）
『芸文類聚』交友の部（但し、テキストによって「蘭芷」「芝蘭」あり）
↓出典を明記せず「録古語」として引用（重刊本『芸文類聚』に基づくか）
天囚書

天囚がこの書を「録古語」としたのは、中国古典に類似句が多く見られ、特定の古典を出典として明示するのがふさわしくないと判断したためであろう。実際には、天囚の書は『芸文類聚』を経由した文言であったと推測される。

この書をいつどのような事情で天囚が揮毫したのかは未詳であるが、書の内容は、儒教における一つの理想を表している。孔子や孟子が活動した春秋戦国時代は、戦乱の続く周王朝の末期であった。軍事力に物を言わせて他国を侵略する強大国もあった。そうした世相の中で、儒家は何より大事なのは、為政者の人徳であると考えた。軍事力や刑罰などによって外側から人々を強制するのではなく、君子の文徳に人々が感化され、自ずから帰服してくるという世界を理想としたのである。そうした君子の姿を説くものの一つが、この『大戴礼記』『孔子家語』などに見られる「芝蘭之室」の譬えであった。朱子学の学統に連なる漢学者天囚も、これを理想として揮毫したのではなかろうか。

なお、この書幅は西村家所蔵資料ではなく、鉄砲館が平成十年（一九九八）に鹿児島在住のコレクターから購入したものであるという。先の落款印からしても、真筆であることは確実であるが、鉄砲館がこれを天囚書と判断して購入した最大の理由は、長尾雨山（ながおうざん）の箱書が備わっていたからであろう。

箱書は表に「西村碩園博士書古語」とあり、蓋の内側に「其友長尾甲觀因署」とある。「長尾甲」とは、高松出身の漢学者・書家・画家・篆刻家である長尾雨山（一八六四～一九四二）（甲は名、雨山は号）で、天囚とは東京大学古典講習科の同級生である。また天囚が大阪で結成した詩文サークル「景社」の同人でもあった。(14)

長尾雨山箱書（表）

印記「蘆中亭」

長尾雨山箱書（裏）署名部分

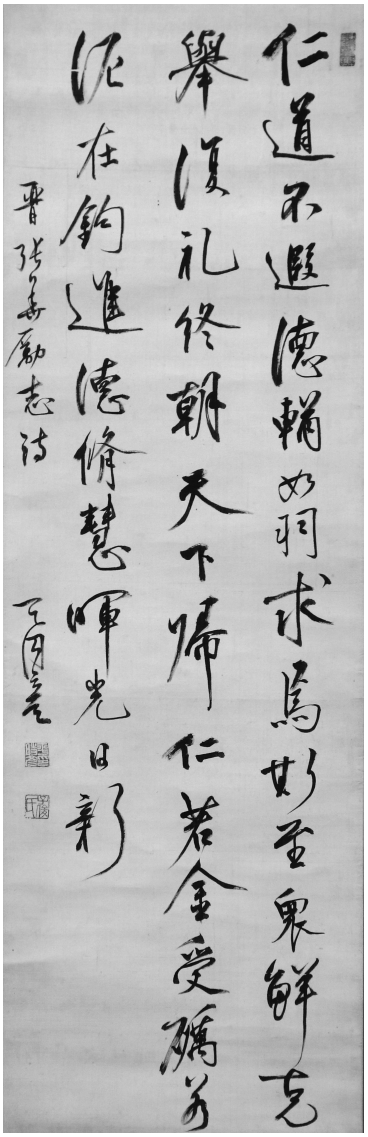
先に西村家で発見された「景社題名」という同人の寄せ書きに「長尾甲」の名が見える。天囚より一歳年上の同輩・友人で、書画に詳しかったことから、鑑定を依頼され署名したものと推測される。「景社題名」の署名とこの箱書の署名とは、よく似ており、特に「長」字の右下へのハライや「毛」の横画の続き工合は特徴的である。署名の後の印は雨山の居所の名「蘆中亭（ろちゅうてい）」である。

また、雨山はこの箱に「西村碩園博士」と記している。天囚が文学博士の称号を得るのは、大正九年（一九二〇）。この鑑定・箱書が備わったのは、大正十三年（一九二四）七月に天囚が亡くなって以降、雨山が亡くなる昭和十七年（一九四二）までの間ということになろう。

景社題名署名（拡大）

八、「仁道不遐」―「類書」を経由した揮毫―

鉄砲館が「與君子游」書を購入した際、実はセットでもう一点、天囚の書幅を購入している（ID8466）。次に、この書について検討してみよう。冒頭の四字をとって「仁道不遐」書と呼んでおく。縦一一七・四×横三七・一cm。



作品の成立時期は未詳であるが、落款に「晋張華勵志詩　天囚彦」とある。関防印「鉄砲権輿」と落款印「平時彦印」「子俊氏」は、「與君子游」書と全く同じである。作品の成立も同時期の可能性がある。

書は天囚が明記している通り、西晋の文人張華（二三二～三〇〇）の「励志」という詩の一節を記したものである。張華は博学で、中国の奇聞・伝説を集めた『博物志』の著者としても知られる。

この「励志」とは、自身の意志を励ますという意味で、『文選』巻十九に「勧励」詩の一つとして収録されている。『文選』は南北朝時代の梁の昭明太子蕭統の編による中国詩文選集。『文選』に記された張華の励志詩は、全九節から成る長文の詩であるが、不思議なことに天囚書は、この内の第三節の一部十六字と第九節の一部二十四字をつなげたものとなっている。

天囚書の全文は、「仁道不遐、徳輶如羽。求焉斯至、衆鮮克舉」「復礼終朝、天下帰仁。若金受礪、若泥在鈞、進徳脩慧、暉光日新」。

但し、「慧」字は、「励志」の原文では「業」である。

「励志」詩の二つの部分を組み合わせた形になっていて、訓読すると、前半は、「仁の道は遐からず、徳の輶きこと羽の如し。焉を求むれば斯に至るも、衆は克く挙ぐること鮮し」。後半は、「礼に復ること終朝ならば、天下仁に帰せん。金の礪を受くるが若く、泥の鈞に在るが若し。徳を進め慧を脩むれば、暉光日びに新たならん」となる。

おおよその意味は、「仁の道は遠くにあるわけではなく、徳は羽のように軽く身につけることができる。求めればすぐに得られるものであるが、大衆で、それをよく取り上げることのできる者は少ない」。「礼を踏み行うこと終日であれば、天下の人々はその人徳に帰服するであろう。金属が砥石にあてられて鋭くなるように、土がろくろによって器になるように。人徳を進め学業（智慧）を修めれば、輝きは日々に新たになるであろう」。

前半後半とも、自己修養による「人徳」形成の大切さを説いているので、意味的にはつながっている。それにしても、天囚はなぜ長文の詩の中からこの二つの部分を抽出して接続させたのであろうか。

長い詩の異なる部分をつなげたことについては、先の「與君子游」書と同じく、中国の百科全書「類書」との関わりが想定される。『芸文類聚』巻二十三人部七の「鑒識」に次のように励志詩が引かれている。

晉張華勵志詩曰、仁道不遐、德輶如羽、求焉斯至、衆鮮克舉、復禮終朝、天下歸仁、若金受礪、若泥在鈞、進德修業、暉光日新。

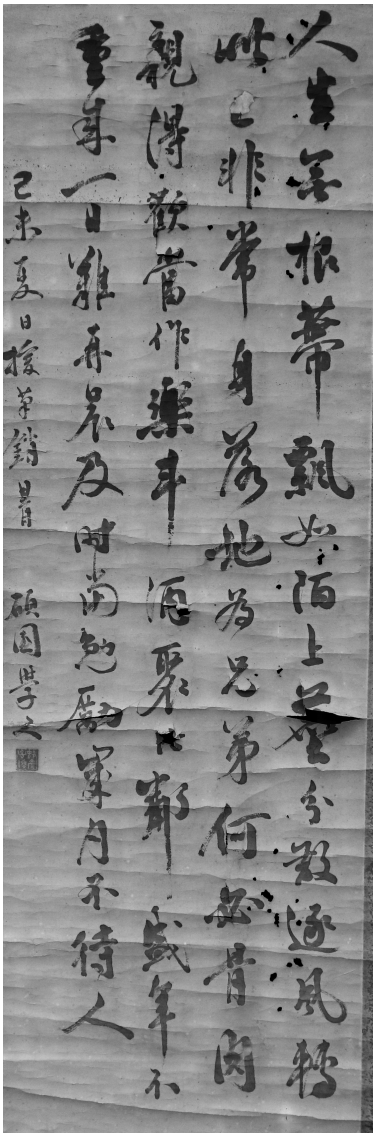
すなわち、張華「励志」詩の第三節と第九節を接合させており、天囚書と見事に合致しているのである。天囚はもちろん『文選』所収の張華の詩は知っていたであろうが、同時に、『芸文類聚』の採録が適切な分量であるとも感じていたのであろう。この書は、天囚が『文選』から直接引用したものではなく、類書の記載に基づいて揮毫したものと推測される。

但し、『芸文類聚』では「進徳修業」となっていて、天囚書が「進徳修慧」としているのは疑問である。そこで、先の「與君子游」書の場合と同じように、懐徳堂文庫本の『重刊芸文類聚』を確認してみよう。すると、引用範囲も同一で、該当部も天囚書と同じく「進徳修慧」となっているのである。従って、この書は、『文選』を基に記したものではなく、実は天囚の見た類書、具体的に言えば、重刊本

の『芸文類聚』に基づくものであった可能性が高い。この関係を図示してみよう。

従来の中国思想史や文学史では、「類書」を正面から取り上げる研究は少なかった。なぜなら、類書は第一次資料ではなく、一次資料を基に採録したダイジェストであり、詩文の作成や出典の検索には便利であっても、あくまで二次資料だと考えられてきたからである。しかし、拙著『故事成語の誕生と変容』で考察したように、中国の主要な故事成語が「類書」を経由することによって成立したり、意味・表現を変容させたりしている場合もあった。またこの天囚書に見られるように、文人が揮毫する際にも実は類書の記載に基づくことがあったのである。「類書」の資料的価値とそれが与えた影響については再認識する必要があろう。

九、「人生無根蔕」―退職の年に示す気概―



次に、令和元年（二〇一九）の資料調査において、西村家で発見された天囚書を取り上げてみよう。長文なので、便宜上、冒頭の五字をとって「人生無根蔕」書と呼んでおく。縦一二八・九×横四一・五cm。

この書の出典は陶淵明「雑詩」其一である。陶淵明（三六五～四二七）は、中国六朝時代を代表する詩人。「帰去来辞」で有名な田園詩人である。漢文は次のように読める。

人生無根蔕、飄如陌上塵、分散逐風轉、此已非常身、落地爲兄弟、何必骨肉親、得歡當作樂、斗酒聚比鄰、盛年不重來、一日難再晨、及時當勉勵、歲月不待人

人生は根蔕無く、飄として陌上の塵の如し。分散し風を逐いて転じ、此れ已に常の身に非ず。地に落ちて兄弟と為る、何ぞ必ずしも骨肉の親のみならん。歓を得ては当に楽しみを作すべし、斗酒比隣を聚めよ。盛年重ねて来らず、一日再び晨なり難し。時に及んで

当に勉励すべし、歳月は人を待たず。

天囚書の字句は陶淵明「雑詩」と同じで、おおよその意味は、「人間の生命には、木の根や蒂のようなよりどころがなく、飄々と舞い上がる路上の塵のようなもの。分散して風に吹き飛ばされて、この身はもとの姿をとどめることができない。この世に生まれ出て、みな兄弟のようなもの。どうして肉親だけと親しもうか。うれしい時は楽しめばよい、酒をたっぷり用意して近隣の仲間を集めよう。元気盛んな年頃は二度とはやってこないし、一日に二度目の朝はない。その時々にせいぜい務め励もう。歳月は人を待ってはくれないのだから」というものである。

では、天囚はこの書をいつどのような心境で揮毫したのであろうか。そこで重要な手がかりとなるのが、落款の「己未夏日」「銷暑」である。「己未」（つちのとひつじ）は大正八年（一九一九）。「銷暑」は暑さをしのぐ。この年の一月、天囚は三十年勤務により朝日新聞社から表彰され、同年十二月に退社している。

この陶淵明の詩は、末尾の四句「盛年重ねて来らず、一日再び晨なり難し。時に及んで当に勉励すべし、歳月は人を待たず」が後に一人歩きし、年少者に向かって勉学を奨励する詩として理解されていくが、それは詩の原義に反している。その直前に「うれしい時は楽しめばよい、酒をたっぷり用意して近隣の仲間を集めよう」とある通り、人生の楽しみと大切さを謳ったものである。

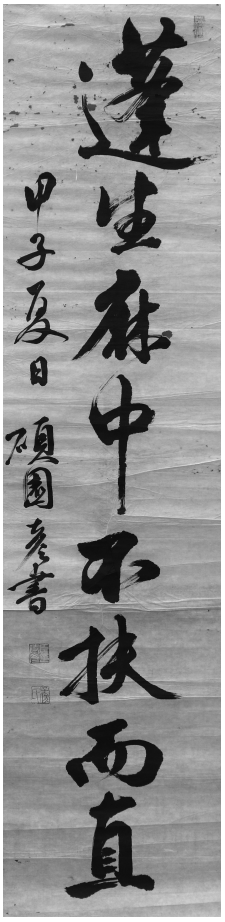
天囚はこの詩を自身の退職の年に記した。詩の原義を正しく踏まえ、さらに人生を謳歌しようという気概を込めて書いたと考えられる。年少者への教訓として揮毫したものではなく、また自身の引退をかみしめるような枯れた内容の詩でもない。大正八年は、天囚の悲願であった懐徳堂が大阪に再建されてから三年目に当たる。天囚はその懐徳堂の教壇にも立ち、京都帝国大学にも出講して熱弁を振るっていた。また、天囚が文学博士の学位を授けられ、島津家編纂所編纂長に就任したのは、翌大正九年であった。益々意気盛んであったと言えよう。

署名と落款印

なお、署名は「碩園學人」、その下の落款印は「村彦子俊」（陰刻）（天囚旧蔵印07）である。「学人」とは、学芸を学ぶ人の意味。前田豊山も「豊山学人」と署名する場合があった。

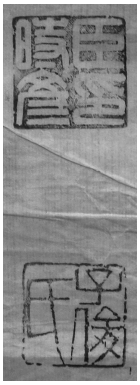
十、「蓬生麻中不扶而直」―天囚の絶筆か―

最後にもう一点、同じく令和元年の調査において西村家で発見された天囚書を取り上げる。縦一二九・七×横三三・二cm。



関防印

落款印



書は「蓬生麻中不扶而直」とあり、出典は『荀子』勧学篇である。

漢文は、「蓬（ほう）、麻中（まちゅう）に生ずれば、扶（たす）けずして直（なお）し」と読む。「蓬（つる草）も麻の中に生えれば、支えがなくてもまっすぐになる」という意味である。出典が『荀子』勧学篇であることから明らかなように、この文は、環境の大切さとその環境に支えられた勉学の重要性を説くものである。「蓬」とは日本のよもぎではなく、つる草のこと。曲がりがちな蓬のつる草も、まっすぐ伸びる麻の中で育つと、支えなくてもまっすぐになると説いている。もちろん『荀子』はここから人間の修養・勉学も同様であると言っているのである。著名な文章で、後にここから「麻中の蓬」という成語もできた。勧学篇は、有名な「青は藍より出でて藍より青し」の出典でもある。勉学と自己修養の重要性を説く篇である。

印記を確認してみよう。右上の関防印は「松柏有本性」（陰刻、方形印）、天囚旧蔵印の25番である。落款印は陰刻の「臣時彦印」（32番）と陽刻の「子俊氏」（22番）である。

それでは、この書を天囚はいつどのような思いで揮毫したのであろうか。手がかりとなるのは、落款の「甲子夏日　碩園彦書」であろう。「碩園」は天囚晩年の号。「甲子」（きのえね）は大正十三年（一九二四）で、この年、兵庫県西宮市に竣工した野球場が「甲子園」と命名されたのは、この干支に由来する。

天囚は大正十年、宮内省御用掛を拝命し、大阪から東京五反田に移った。大正十二年（一九二三）九月の関東大震災時は東京にいたが、直接の被災は免れ、同年十一月、重建懐徳堂開学七年目に当たって堂友会が発足した際には、夜行列車で大阪に帰り、その記念式典に出席している。大震災で関東圏の鉄道は壊滅的な惨状となったが、不通となっていた東京・御殿場間も十月二十八日に復旧したばかりであった(15)。

翌大正十三年一月の御講書始の儀では京都大学の狩野直喜が進講を務め、天囚は御講書控となって陪席を許された。天囚は万一に備えて毎日声に出して講義の練習を続けていたという(16)。しかし、同年五月に肺炎を発病、脳症も併発し、七月二十九日に六十歳で急逝した。従って、この書はその発病・逝去の年の書ということになり、あるいは絶筆であった可能性もある。

雄渾な筆跡で記されているので、病床で揮毫したという可能性は低いと思われるが、その日を特定できるであろうか。実は、天囚の手帳十九冊が郷里種子島の西村家に保管されており、その大正十三年分を見ると、意外な事実が判明する。天囚は一月三日、「史局」（島津家編纂所）の御用始めを皮切りに、「宮内省」への登省、「文化学院」（大東文化学院）への出講を続け、また依頼されたと思われる漢文や墓碑銘などを次々と起草し、多くの来客に対応するなど、この年も多忙な日々を送っていた。

天囚が発病するのは、後醍院良正『西村天囚伝』により、同年五月と伝えられてきたが、実はすでに一月頃から「微恙欠勤」「終日養病」「在家養病」などという体調不良・自宅養生の記載が散見され、医師の往診を仰いでいることが分かる。三月には、「登省早退」「至史局疾甚帰家」などという日もある。出勤後に体調不良となって早退したのである。四月になると「微恙不出門」「微恙在家」とあるように、体調不良で外出できない日も出てくる。徐々に体調が悪化していたのであろう。その前年の大正十二年正月も寒気で風邪を引き、一月十二日から二月十日まで床に伏せっている。東京への転居、宮内省勤務や島津家編纂局長としての重責など、疲労が蓄積していたのではなかろうか(17)。

ただそうした中でも、『論語』『唐鑑』『楚辞』などの書名が記されている日もあり、自宅で読書に努めていた様子が分かる。また、十

一年の日記には、「在寓写字」「在家写字」、十二年には「終日作字」「午後揮毫」「午後作字」などと記す日がある。また大正十三年の二月と三月にも、それぞれ一度ずつ自宅で「作字」したとの記載が見える。そして、四月二十三日、この日もやや体調不良だったようで、「微恙在家」とあるのに続き、「下午作字」と記されている。さらに五月四日にも「終日在家作字」とある。

この「作字」とは、現在の、標準字体にはない特殊文字を作るという印刷用語ではなく、「写字」や「揮毫」と同じく、毛筆で書をかいたという意味ではなかろうか。もしそうだとすると、同年「夏日」の落款のあるこの書が自宅で「作字」されたのは、四月二十三日または五月四日ということになろう。手帳の記載は、五月六日の「至史局」という簡潔な記載で終わっている。毎日欠かすことなく付けられてきた日記がここで途切れているのである。もし五月四日の揮毫だったとすれば、それは手帳が空白となる二日前ということになる。

その時点で天囚が自身の死を予感していたかどうかは分からないが、書の文面や筆勢からは、晩年においてもなお勉学に努めようとする天囚の気概を感ずることができる。

結　語

文献以外のものから思想を読み解くのは難しい。しかし、文人の足跡は、著書や論文として残されるものだけではない。墨跡・絵画・建築物など、あらゆるものに刻印されていると言えよう。

本稿では、種子島の前田豊山と西村天囚の書を取り上げて、その思想の一端を探ってみた。それぞれの書は、漢学者としての教養にあふれ、また、朱子学の伝統や種子島の歴史を反映するものもあった。さらにその文言は、自身の詩・文、古典から直接引用されたもののほか、中国の百科全書「類書」を経由しているのではないかと推測されるものもあった。

前田豊山は、平素から経書・史書を読み、詩歌文章を楽しみ、書と詩作を得意とし、公務の余暇には、門下生を率いて郊外を散策し、詩は作文の一端であると奨励していたという（『豊山遺稿』）。書や詩作は豊山と天囚の人生を考える際の重要な資料であり、本稿の考察でもそれが実証されたと言えよう。種子島には、これ以外にも多くの文化財が存在する。令和六年（二〇二四）の天囚没後百年に向けて、さらに調査研究を進めていきたい。

【関係略年表】（ゴシック体は本稿で取り上げた書作品）

天文十二年（一五四三）　種子島に鉄砲伝来。天囚の祖先西村織部丞時貫が対応する。
天保二年（一八三一）　前田豊山、種子島に生まれる。
慶応元年（一八六五）　西村天囚、種子島に生まれる。
明治二年（一八六九）　懐徳堂閉校。版籍奉還。
同十三年（一八八〇）　天囚上京し、重野安繹・島田篁村に師事する。
同十六年（一八八三）　天囚、東京大学古典講習科乙部（漢書課）に官費生として入学。
同二十年（一八八七）　官費制度廃止により中退。出世作『屑屋の籠』刊行。
同二十二年（一八八九）　東京から大阪に移り、大阪公論の記者となる。
同二十三年（一八九〇）　大阪公論廃刊により、大阪朝日編集局員となる。
同三十年（一八九七）　清国出張。上海を経て漢口（武漢）着。
同三十一年（一八九八）　張之洞ら清国要人と会談。その帰途、金陵（南京）に立ち寄る。**「金陵懐古」詩。**
同三十二年（一八九九）　天囚、『南島偉功伝』刊行。**「君父師友」書。**
同三十三年（一九〇〇）　種子島守時、男爵を授けられる。前田豊山**「百事無能」書。**
同三十五年（一九〇二）　前田豊山藍綬褒章を受ける。**「立誠」書。**
同三十七年（一九〇四）　一月五日、朝日新聞「天声人語」第一回掲載。二月十日、日露戦争開戦。
同四十二年（一九〇九）　天囚の主著『日本宋学史』刊行。大阪人文会発足。
同四十三年（一九一〇）　天囚、二月「懐徳堂研究」連載開始。四月～七月、朝日新聞社主催第二回「世界一周会」に特派記者として同行。十月、世界一周会の紀行を『欧米遊覧記』として刊行。懐徳堂記念会発足。
同四十四年（一九一一）　大阪の文人サークル「景社」結成。十月五日、中之島公会堂において懐徳堂祭典挙行。

同四十五年（一九一二）　**「與君子游」書**。七月、明治天皇崩御。大正と改元。
大正二年（一九一三）　前田豊山、八十三歳で亡くなる。
大正五年（一九一六）　天囚、京都帝国大学講師として出講。十月、懐徳堂再建（重建懐徳堂開学）。自らも理事・講師を務める。
同八年（一九一九）　天囚、**「人生無根蔕」書**。三十年勤務により朝日新聞社を退社。
同九年（一九二〇）　五月、天囚、文学博士の学位を授けられる。六月、島津家編纂所編纂長となる。
同十年（一九二一）　一月、天囚、鉄砲伝来紀功碑文を撰文。種子島の門倉岬に石碑建立される。宮内省御用掛に任ぜられ、十月三日、東京五反田下大崎の島津邸役宅に転居。
同十二年（一九二三）　九月、関東大震災。十一月、懐徳堂堂友会発足。
同十三年（一九二四）　天囚、一月、御講書始控となる。**「蓬生麻中不扶而直」書**。五月、肺炎を発病。七月二十九日死去。享年六十。従四位勲四等瑞宝章を追贈される。
令和六年（二〇二四）　懐徳堂創設三百年。西村天囚没後百年。

注

（1）種子島における資料調査の概要については、湯浅邦弘・竹田健二・佐伯薫「西村天囚関係資料調査報告―種子島西村家訪問記―」（『懐徳』第八十六号、二〇一八）、拙稿「平成三十年度（二〇一八）種子島西村天囚関係資料調査について」（『懐徳』第八十七号、二〇一九年）、拙稿「西村天囚の知のネットワーク―種子島西村家所蔵資料を中心として―」（同）、拙稿「小宇宙に込めた天囚の思い―種子島西村家所蔵西村天囚旧蔵印について―」（『懐徳堂研究』第十二号、二〇二一年）参照。また、それら全体の資料リストについては、竹田健二・湯浅邦弘・池田光子「西村家所蔵西村天囚関係資料暫定目録（遺著・書画類等）」（『懐徳堂研究』第十二号、二〇二一年）および「同・補訂（拓本類）」（『懐徳堂研究』第十三号、二〇二二年）参照。

（2）本稿第七章で取り上げる「景社題名」の寄せ書きにおいて、内藤湖南は「脩辞立誠」と記している。

（3）山形市市史編集委員会編『山形市史』中巻近世編（一九七一年）。但し、「立誠」の名の由来、漢語の出典については解説がない。なお、大石

学『近世藩制・藩校大事典』（吉川弘文館、二〇〇六年）は全国すべての藩校情報を網羅した大作で、山形藩の藩校についても記しているが、『山形市史』同様、「立誠」の名の由来については説明がない。

（4）この書の成立の経緯について、同書「緒言」の説明によると、豊山が逝去した大正二年（一九一三）に豊山会が組織され、遺稿編纂の議が起こったがその時点では実現しなかったという。その後、鹿児島県における朱子学の調査のためにまず豊山の伝記が編纂され、大正十三年二月十七日に門下生が集まってその草稿を校閲するとともに、遺稿を編纂するため委員三名を選出して資料収集を始めたが、資金の都合により頓挫していたという。その後、有志者の援助があり、大正十五年の上梓に至ったのが、この『豊山遺稿』である。

（5）種子島氏の墓所は二箇所ある。一つは、市内西町の御坊（おぼう）墓地。これは、種子島家最初の墓地であり、種子島家の祈願寺であった慈遠寺（現・八坂神社）の北側に位置する。ここには初代から四代までが合祀されているほか、鉄砲伝来の時の島主種子島第十四代時堯（ときたか）の墓や家臣たちの墓も含む。もう一つは、同市内中目の栖林（せいりん）神社の敷地内にある御拝塔である。現地では「おはーとー」と発音される。栖林神社の祭神は、第十九代島主種子島久基で、文久三年（一八六三）、第二十三代島主久道の夫人松寿院（しょうじゅいん）が建立したものである。この点については、柳田桃太郎『種子島の人』（一九七五年）、村川元子『松寿院―種子島の女殿様』（南方新社、二〇一四年）参照。豊山がどちらの墓地を意識して述べているのかは未詳であるが、いずれも小高い丘の上にあり、「登」という表現には両方とも合致する。

（6）天囚が特使として派遣される背景として、シベリア単独横断を果たした福島安正陸軍中佐との関わりがあった。その詳細については、拙著『世界は縮まれり―西村天囚『欧米遊覧記』を読む―』（KADOKAWA、二〇二二年）第十三章参照。

（7）さらにその後、明はこの地に都を置いたが、第三代皇帝永楽帝が北平に都を移して「北京」と称した。これにより、この地は南の都「南京」と称されるようになった。天囚が渡航した清代では「江中府」が正式な行政名称であったが、最も由緒ある名として当時も「金陵」が使われている。

（8）以下の金陵関係地については、朱偰『金陵古迹図考』（中華書局、二〇〇六年）、南京出版社編『南京旧影老地図―一九〇三年陸師学堂新測金陵省城全図―』（南京出版社、二〇一四年）、姚亦鋒『南京古都地理空間与景観過程』（科学出版社、二〇一九年）を参考にした。本稿に掲げた地図は、『金陵古迹図考』附録の「金陵附近郭古蹟路線図」に基づいて筆者が作図したものである。なお、同書・同地図の存在については、大阪大学の浅見洋二教授（中国文学）のご教示を得た。

（9）新亭と労労亭との関係および現在地については未詳である。植木久之編『中国詩跡事典』（研文出版、二〇一五年）によれば、労労亭は三国時代呉の労労山に設けられた望遠亭が起源で、南朝宋の時に臨滄亭、さらに労労亭に改称されたという。またそれは、六朝以降の交通・軍事の要衝で、貴族たちの遊宴・離別の地「新亭」のある丘の上にあったという。また一説に、労労亭は新亭と同一でもあるという。

（10）この文献の原題は『支那文明記』といい、初版は明治四十五年（一九一二）に大同館から刊行された。後、改題出版され、さらに平成十八年（二〇〇六）、講談社学術文庫として再版された。

（11）落款の作法全般については、細谷恵志『落款のてびき』（二玄社、二〇〇二年）、北川博邦『モノをいう落款』（二玄社、二〇〇八年）を参考にした。

（12）鉄砲伝来紀功碑文の詳細については、拙稿「鉄砲伝来紀功碑文の成立」（島根大学教育学部国文学会『国語教育論叢』第二十七号、二〇二〇年）参照。この石碑は、大正十年（一九二一）、種子島南端の門倉岬に建てられた。

（13）この点の詳細については、前掲「鉄砲伝来紀功碑文の成立」参照。

（14）天囚を中心とする知のネットワークについては、注（1）前掲の拙稿「西村天囚の知のネットワーク―種子島西村家所蔵資料を中心として―」参照。

（15）東京鉄道局写真部編『関東大震災鉄道被害写真集』（吉川弘文館、二〇二〇年）参照。なお、同書の原本は、『大正十二年九月一日関東地方大震災記念写真帖―惨状と復旧一九二三―一九二四』（東京鉄道局写真部、一九二四年）である。

（16）大正十年（一九二一）、天囚は宮内省御用掛に任ぜられ、大正十三年には御講書控となった。同年夏に亡くなったことから、実際に皇族の方々に講義をする機会はなかったが、その進講の草稿と思われる資料が種子島で発見された。西村家から種子島開発総合センター（鉄砲館）に寄託されていた「詩經大雅假樂篇講義」と題する自筆草稿である。天囚は『詩経』の講義を計画していたようで、その草稿を墨筆で次のように記している（旧漢字を現行字体にし、カタカナをひながらに改め、冒頭部のみ掲げる）。「本日の御講書始に、臣時彦浅学菲才（せんがくひさい）の身をもちまして、漢書進講の　大命を拝し、誠に恐懼感激の至にござりまする。謹みて進講致しまする漢書は、詩経大雅仮楽の篇でござりまする」。「大命」の前が空いているのは、空格の礼である。この草稿の詳細については、別稿において紹介したい。

（17）後醍院良正『西村天囚伝』（一九六七年、非売品）は、大正十三年五月十日、天囚が宮内省に出仕した際、異様な悪寒を覚え、それにも関わら

ず宮内省の有志に『論語』の講義をする予定があったため無理をして勤務を続けたものの、翌日には病床に伏せることとなったと発病の様子を伝えている。しかし、天囚の手帳を精査すると、この日突然体調を崩したのではなく、一月頃からすでに体調不良が続いていたことが分かる。また、後醍院『西村天囚伝』は、天囚が自宅から郊外に出たのは、三月二十日が最後だったと記すが、これは四月二十日の誤記であることが、同じく手帳の記載から分かる。天囚は、この日、早朝に起き、元同僚で金石文研究家の木崎好尚（愛吉）、書家の梅園良正らと池袋駅で待ち合わせ、西武鉄道仏子駅で下車、入間川北岸の円照寺まで散策している。これが天囚最後の遠出となった。

【附記】

本稿は、令和三年（二〇二一）に大阪大学文学研究科と鹿児島県西之表市とが正式締結した共同研究「西村天囚関係資料の研究」、および日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究Ｂ「日本近代人文学の再構築と漢学の伝統―西村天囚関係新資料の調査研究を中心として―」（A21H00465a、令和三年度～六年度）による研究成果の一部である。科研基盤Ｂの研究代表者は島根大学竹田健二教授、分担者は関西大学陶徳民教授、二松学舎大学町泉寿郎教授、および湯浅である。

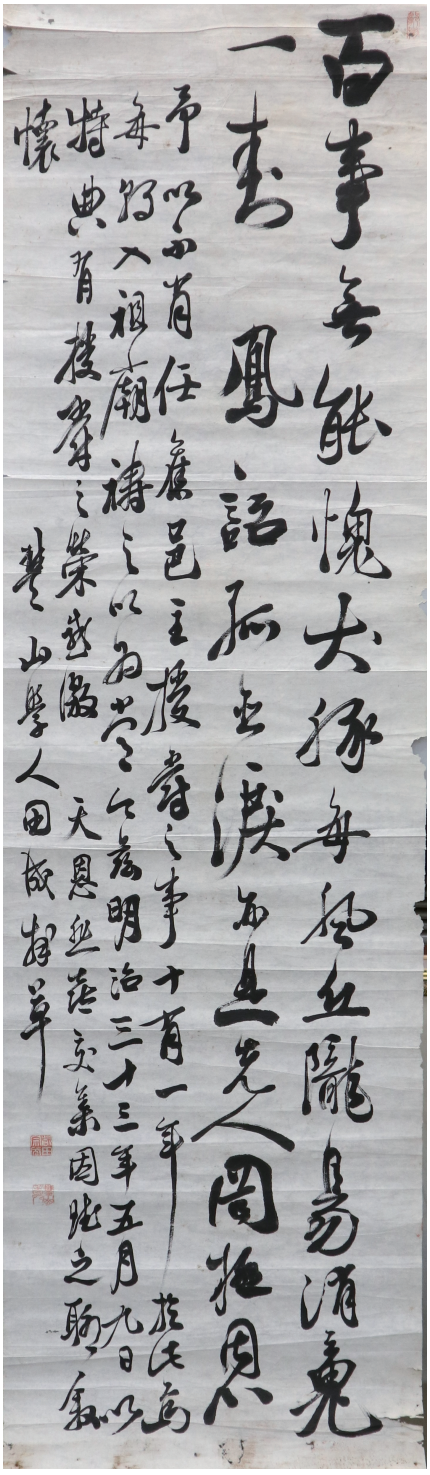
本稿の執筆に際し、貴重な書の撮影・掲載についてご了承いただいた西村貞則氏、高﨑彰氏、長野正育氏、および鹿児島県西之表市の種子島開発総合センター（鉄砲館）に厚く御礼申し上げたい。また種子島での資料調査については島根大学の竹田健二教授、松江工業高等専門学校の池田光子准教授のご協力を得た。

なお、大阪大学と西之表市との共同研究のメンバーは以下の通りである。

大阪大学
湯浅　邦弘（大阪大学中国哲学研究室教授）
西之表市
沖田純一郎（西之表市教育委員会社会教育課・参事）
鮫島　斉（西之表市教育委員会社会教育課文化財係・係長）
梶原　将貴（西之表市教育委員会社会教育課文化財係・主事）
中島　恵（西之表市役所企画課歴史文化活用係・係長）
荒河　翼（西之表市役所企画課歴史文化活用係・主査）
田上　美子（西之表市教育委員会社会教育課社会教育係・係長）
鮫嶋　安豊（西之表市立図書館長）
柳田さゆり（西之表市役所高齢者支援課・課長）

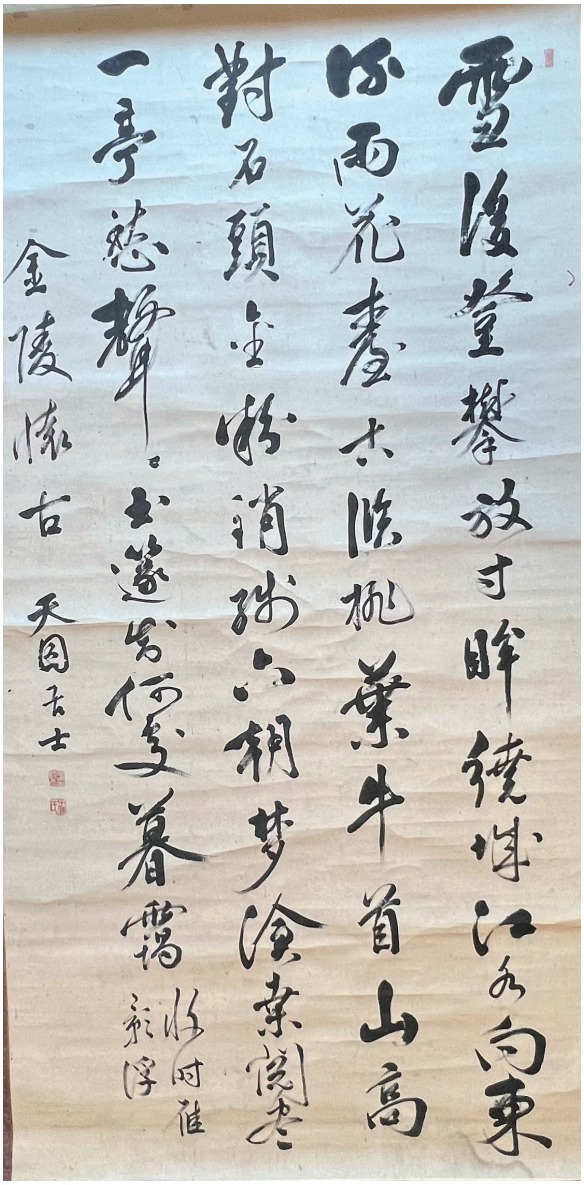
本稿で取り上げた前田豊山・西村天囚の書を、次頁から順次カラーで掲載する。これらはいずれも最近の調査で確認・発見されたものであり、経年劣化が著しいもの、捲りのままであるものがほとんどである。また充分な撮影機材や照明設備のない中、筆者のデジタルカメラで簡易撮影した画像である。書芸術の鑑賞用として掲載するものではなく、将来の資料修復に備えて、あえて現状のままお示しする次第である。

一、前田豊山「立誠」

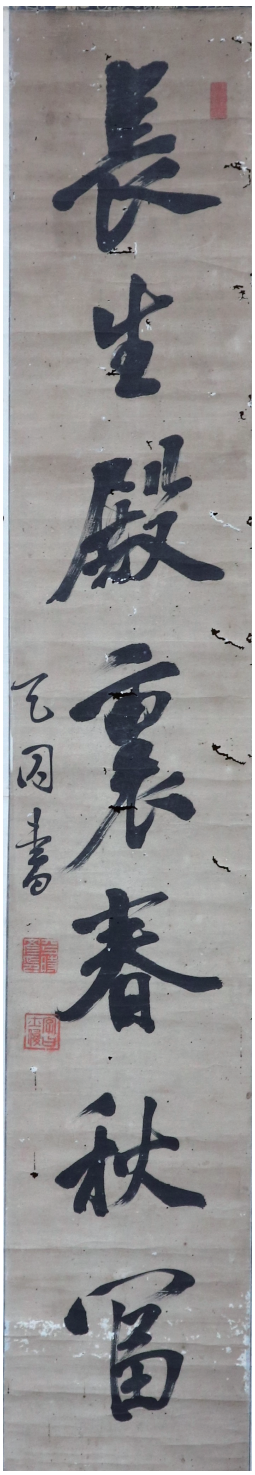


百事無能愧大孫每私泣隴畝易消兒
一書鳳語和平淚無是老人閑報恩
辛巳首任參邑主授警之事十有一年每
好入祖廟禱之以為忠之有明治三十三年五月九日以
特典賜授警之榮感激天恩益益盡忠報國此之謂歟
豊山學人田敬拜草

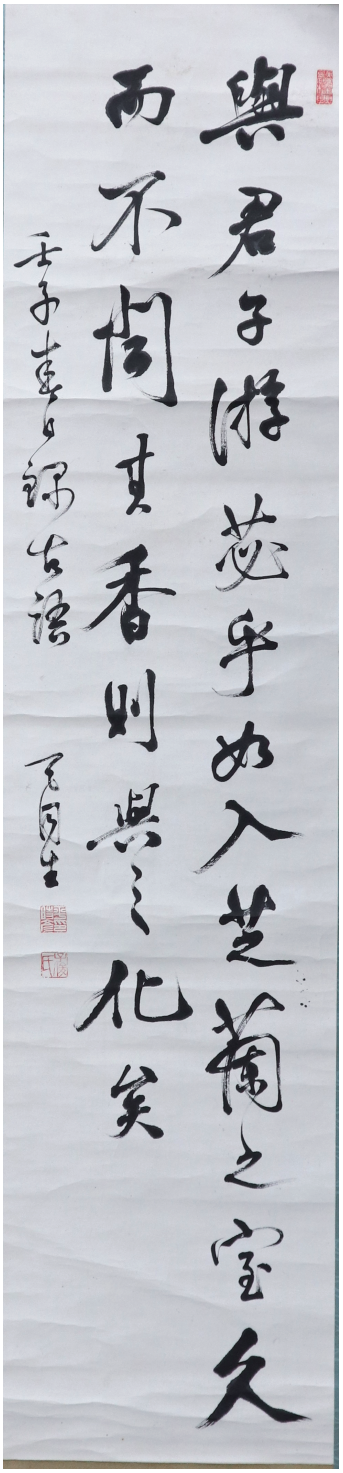
三、前田豊山「暗香浮動」

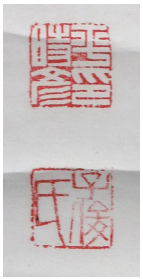

金陵懷古
天囚吉士

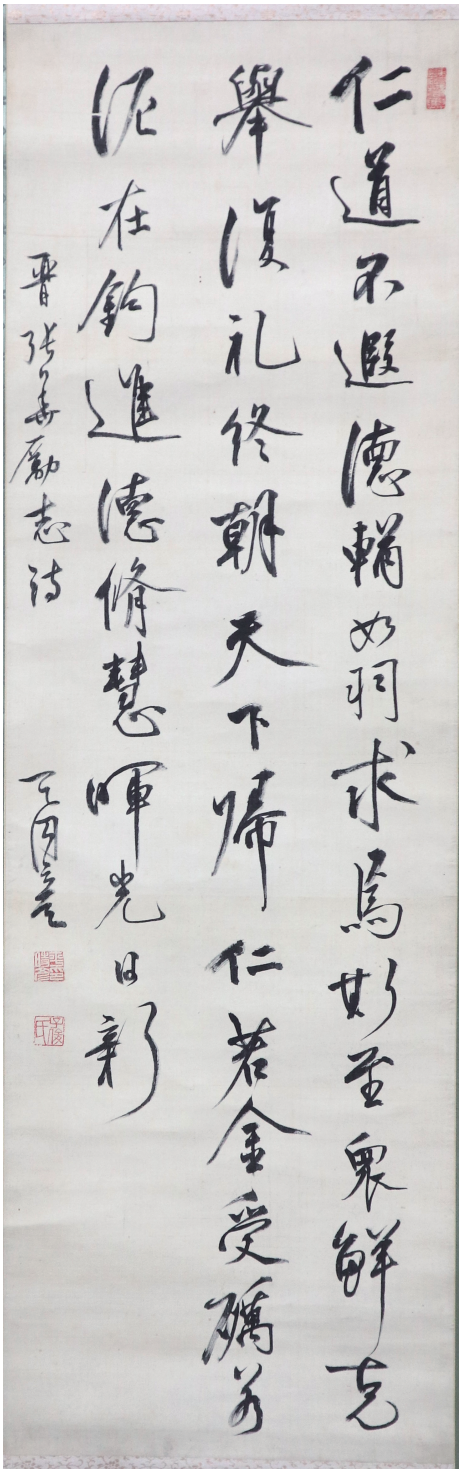
五、西村天囚「君父師友」

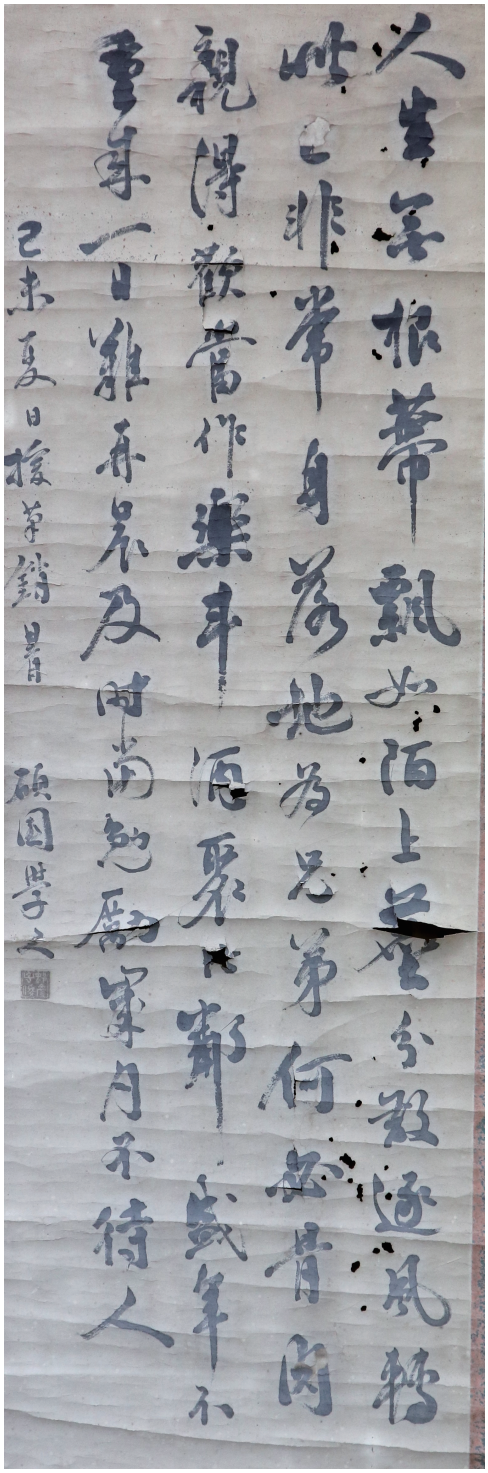

長生殿裏春秋富
天囚書

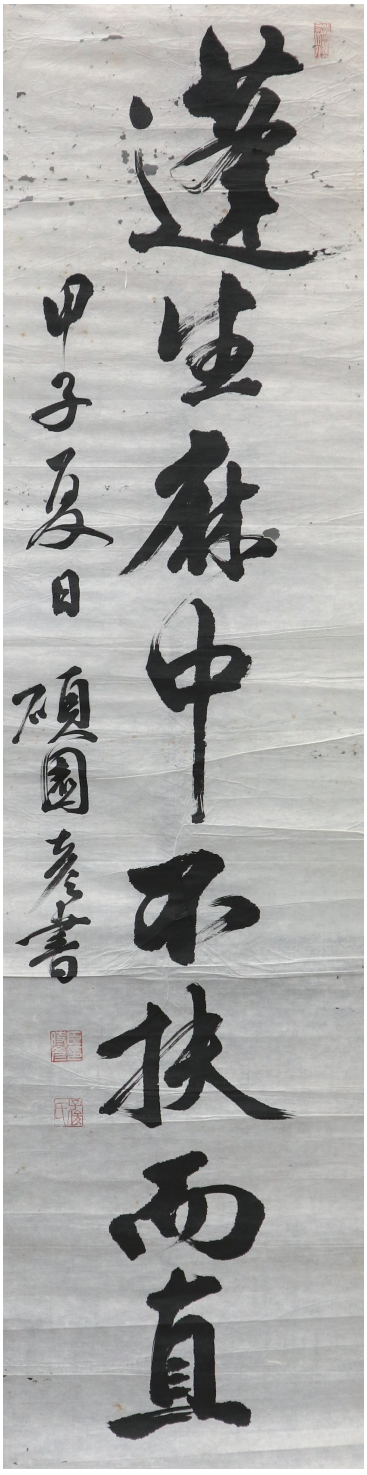
七、西村天囚「與君子游」






仁道不遐德輶如羽求爲好音衆鮮克
舉復礼終朝天下歸仁若金受礪爲
忱在鈎進德脩慧暉光日新
晉張華勵志詩
丙寅冬




蓬生麻中不扶而直
甲子夏日 頑園老書

遺墨中的漢學傳統
——前田豐山・西村天囚的書法——

湯淺邦弘

前田豐山（1831 ～ 1913）**爲**種子島（現鹿**児**島縣西之表市）出身的漢學者。其**爲**當地的教育及文化留下了莫大的功績，被人稱**爲**「種子島聖人」。西村天囚（1865 ～ 1924）學於豐山，**爲**明治・大正時期具有代表性的新聞記者及漢學者。

作**爲**懷德堂研究以及西村天囚研究的一環，筆者從平成29年（2017）開始，在當地進行文物調**査**，在此過程當中，新發現了豐山及天囚的遺墨。通過對該資料的解讀，或可以明確豐山及天囚思想的一端。

關於前田豐山，已有綜合其遺文的『豐山遺稿』，只是尚無較**爲**完整的研究書。關於西村天囚，也有懷德堂記念会編『碩園先生文集』及後醍院良正『西村天囚傳』等基礎資料，但是對於其在日本漢學史及日本近代人文學史上的意義，尚無明確的研究。因此將該書法作品當作研究的突破口具有一定的意義。在本稿中，將對前田豐山的3件書法作品（一～三）、西村天囚的7件書法作品（四～十）順次加以考察。其具體內容如下。

一、前田豐山「立誠」—盡力於種子島的誠—
二、「百事無能」—**爲**之奉獻一生的種子島氏授爵—
三、「暗香浮動」—恰如幽暗四溢的梅香—
四、西村天囚「金陵懷古」—天囚所懷之古—
五、「君父師友」—與前田豐山的記念碑—
六、「長生殿裏春秋富」—祈禱長壽與繁榮—
七、「與君子游」—受君子所感化—
八、「仁道不遐」—經由「類書」的揮毫—
九、「人生無根蔕」—退休之年表現的氣概—
十、「蓬生麻中不扶而直」—是否**爲**天囚的**絶**筆—

從文獻以外的資料解讀思想頗**爲**困難。但是，文人的足跡，並非僅留有著書及論文。還有墨跡、**絵**畫、演劇、建築物等，可以說足跡的刻印無所不在。

本稿以種子島的前田豐山與西村天囚的書法作品**爲**主，來探究其思想的一端。每一件書法作品，均充滿了漢學者的教養，有的作品還反映了朱子學的傳統以及種子島的歷史。而且，作

品中的文辭除了直接引用自其本身的詩文或古典文獻外，還有一部分或經由自中國的百科全書「類書」。

前田豐山平素閱讀經書、史書，積極創作詩歌文章，而且長於書法，尤其致力於詩作。在其公務的餘暇，率門下生們散策郊外，還以詩**爲**作文的一部分加以獎勵（『豐山遺稿』）。在探討豐山與天囚的人生之際，書法作品及詩作無疑是重要的資料，通過本稿的考察，可以說進一步證實了此點。